

498は加曾利B式の紐線文土器で地文は無筋Rである。肥厚する口唇部外端に押圧状の刻みを施す。

499~510は深鉢以外の器形を一括した。499~509は鉢ないしは浅鉢で、510は壺である。

499は横帯文構成で段違いの区切文を持つ。500は横帯文を持ち、501は縄文を持たない。502は横位の沈線区画内に斜線文を描出する。503は大森タイプの弧線文を持つ浅鉢である。弧線の接点に円文を持ち、胴部に二本の沈線を垂下させる。

504は口縁が内屈し、口唇部に刻みを加え漣状となる浅鉢で、内面には隆帯状の段と列点を施す。505~507は口縁部がくの字に屈曲する浅鉢で、505・506は屈曲部に列点を充填する沈線区画を持ち、505・507は口唇部に刻みを施す。

508は口縁部が内屈する無文の鉢である。509は内文を持つ浅鉢で、内文は区切文を持たず、横線を折り返し、蛇行ないしは楕円形区画とする。区画内は刻みを持つ。510の壺の肩部文様に区切文は無く、折り返している。「の」字文を持ち、LR縄文を施文する。511は大森タイプの深鉢だろう。

第148図512は双頭の突起を持つ波状口縁深鉢で、突起は表裏ともに磨く。類例に乏しく時期判定が難しいが、後期後葉頃と考えておく。

514・515は後期後葉~晩期前葉の安行式大波状口縁深鉢、516~518・520は並行する時期の平口縁深鉢、519・522・523はその胴部である。

513は無刻の縮を持つ安行1式の平口縁深鉢である。514は波頂部が失われているが、直下に中央の窪む円形貼付文と豚鼻状貼付文を縦列に配す。縄文帯のRL縄文の節はかなり細かい。開削部土器集積層出土土器(第98図2)と同一個体である。515は波頂部に、縦刻のある鱗状突起を持ち、直下に舌状二段縮と豚鼻状貼付文を縦列に配す。器面の凹凸も、器形にメリハリもない。安行3b式であろう。516は横刻縦縮を二段に配す。518は口縁部外面に無刻の横縮を貼付する。520・521は鉢形土器で、520の口縁部突起は二山になる

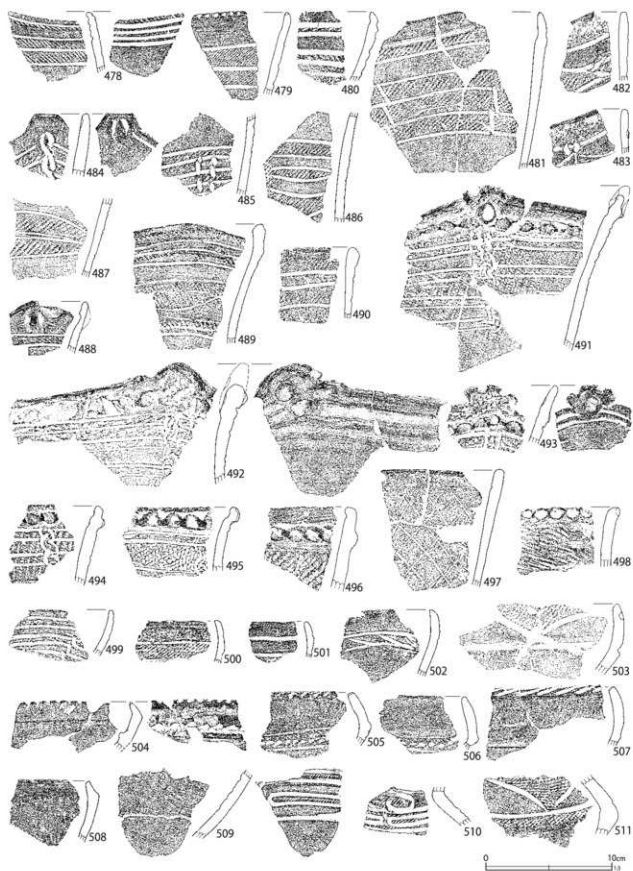
だろう。521は口縁部が外側に短く外反する。凹線状の沈線で字状文を描出する前浦式であろう。522は鉢の胴部で、内外面の全面に炭化物が付着する。523は胴部が「く」の字に屈曲し、屈曲部に縮を配する。注口土器であろうか。

524~531は晩期中葉の深鉢で、530は平口縁で、それ以外は同一個体の波状口縁である。波状口縁深鉢の口端部はいずれも面取りが顕著である。区画帯の列点は複列化し、波頂部下に入組三叉文が描出される。器面は磨かず、最終調整はケズリである。530は区画帯の列点が単列で、入組三叉文を描出する。器面の最終調整はミガキでやや光沢がある。安行3d式であろうか。

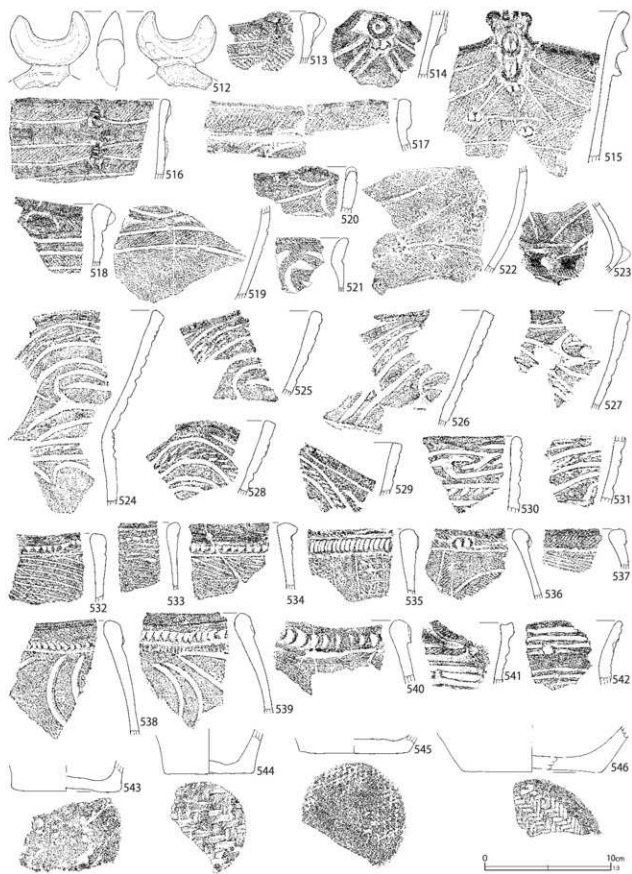
532~534は後期後葉の条線文土器、535~540は晩期前葉までの紐線文土器である。532は肥厚する口縁部に列点と沈線区画を持つ。533は口縁がやや外側に肥厚し、口縁部に列点のみを持つ。534は口端部が著しく外屈し、直下に列点と沈線区画を持つ。535は安行3a式の紐線文土器で、縦位区画内に横線を充填する梯子状の文様を持つ。外面には沈線後に列点(錐側面圧痕に似るが繊維痕は無い)を不規則に押圧する。紐線文の押圧方向は右である。538・539は肥厚・有段の口縁部に列点を施文する土器で、条線は消失し、539の器面調整はケズリである。ともに太沈線で弧線を描出する。538では列点の下位3.0cmに列点と平行する点状の微細圧痕があり、施文具と関係する可能性がある。また539では、口縁部の段を定着させた圧痕が連続し、列点と対応するように見える。540は口縁部に段のある紐線文土器で、押圧の方向は左である。条線は消失し、調整はケズリである。沈線で弧線を描出するものであろう。

536・537は肥厚する口縁部に縄文を施文する深鉢で、536の口縁部に豚鼻状貼付文、胴部には縦位と弧線文を描出する。537は横位の多条沈線を描出する。いずれも安行3b式あたりであろう。

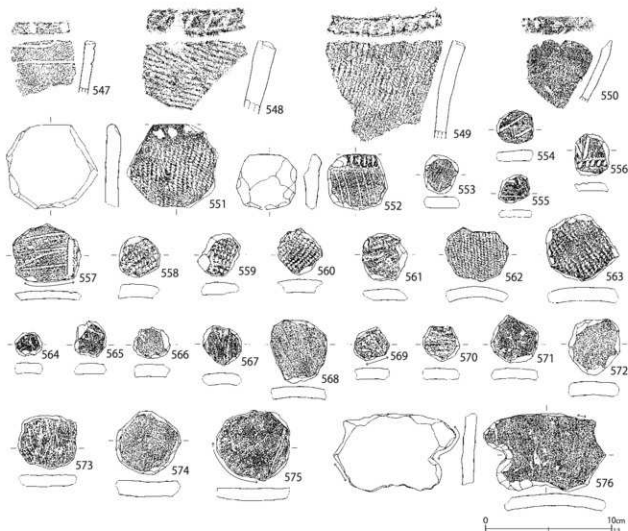
541は口唇部に凹線を持つ波状の口縁で、胴部



第147図 東斜面出土遺物 (17)



第148図 東斜面出土遺物 (18)



第149図 東斜面出土遺物 (19)

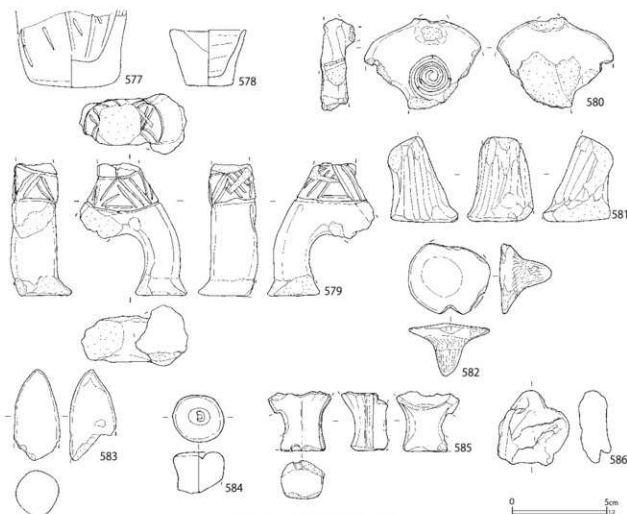
が広がる可能性がある。工字文風の文様が見え、大洞A式並行の土器であろう。542は判然としなが、口縁部に沈線が三～四段巡り、沈線を切る円形刺突文を施す。括れた頸部にも沈線が巡る。調整は丁寧なミガキだが、文様は稚拙である。

543～546は底部を一括した。543は中央が上げ底気味で、周囲にのみ木葉痕が残る。544～546は底面に編組痕が残る。544・546は網代編みで、544は二本潜り二本越え、546は三本潜り三本越えである。546は外周のみ調整する。545はござ目編みで部分的に調整している。

第149図547～550は接合帯に刻み目のある土器片である。547は堀之内2式、548・549は諸特徴から堀之内式期の中で捉えられるものである。

**土器片加工品** 第149図551～576は土器片加工品である。551・552はⅠ類（口縁部）、553～572はⅡ類（胴部）、573～575はⅢ類（底部）で、576は土器片錘である。素材は、558～563が縄文のみ、564～572が無文部（最終調整は564～568がミガキ、569～572はケズリ）である。時期は562が早期、553が加曾利B、557・573が晩期であるほかは堀之内式である。576の挟入部は1箇所だが対向する側縁に摩耗がある。

**土製品** 第150図577・578はミニチュア土器、579～581は土偶、586は焼成粘土塊、582～585はそれ以外の土製品である。577は胴部に沈線と列点を施す。文様と胎土・焼成の特徴から後期前葉頃と思われる。578は器高3.0cmの小型品で器壁も薄



第150図 東斜面出土遺物 (20)

い。器形は口縁部へ向かって直線的に広がる。

579は中実土偶の胴部下半で、左脚部のみ残る。脚部は踏ん張るように開き、足裏は接地面にびたりと付き、自立が意識されている。腰部の文様は、二本の横位沈線間に斜行沈線を充填し、各面で三角形文となる。加曽利B式期の土偶である。580は板状の胴部のみで、前方へ張り出す頭部がつくタイプであろう。脇(腕部の付け根付近)には貫通孔が開き、正面の腹部には沈線で渦巻文が描出される。堀之内式期であろう。581は脚部破片で外側へ直線的に開く。足裏は接地面にびたりと付き、自立が意識されている。後期中頃だろうか。

582はいわゆるキノコ形土製品である。周辺遺跡に類例はないが、北東北の後期前葉(十腰内式期)に急増する。傘は水平に開き、軸は歪みなく

これと直交する、傘の一方にスリットが入る。

583~585は不明土製品としたが、584は柱状の耳飾りの可能性がある。表面中央に窪みを持ち、側面は臼状に括れる。583は円錐形の土製品で下部は欠損する。585は下部が柱状、上部は皿状(左向きの片口状)である。下部は広がり、底面は平坦なため、これが接地面であろう。底面一方に棒状工具の押圧が入り、側面にミミズ腫れ状の微隆線が垂下する。586は焼成粘土塊である。

**石器・石製品類** 第151図587~594は石鏃で、593・594は未製品である。587は無茎で平基気味の黒曜石製、588~590は凹基である。587・588は直線基調、589・590は曲線基調に作られる。591・592は有茎鏃で、591は身部の外形に顕著な変曲点を持つ。遺構外出土石器(第212図91・92)に類品がある。592

の肩部は外形が曲線基調で、水場遺構最下層出土の第107図60と良く似る。593・594は裏面の加工が部分的である。

595は石錐で錐部は欠損している。

596～601はスクレイパーとした。このうち597・599は遠隔地石材の珪質頁岩製である。596は縁辺全体的に両面加工を施し、本遺跡では珍しい。597・598・601は急角度の刃部を有するスクレイパー（搔器）である。599は縦長剥片の長辺一側縁に両面加工が施す。600は黒曜石の剥片の一側縁に微細な剥離が連続する。

602・603は剥離性の乏しい石材の剥片を素材とする微細剥離剥片で、602は矩形剥片の二側縁に、また603はもと敲磨器と見られる剥片の一側縁に微細剥離が見られる。

第152図604～606は分銅形の打製石斧である。604は本書対象中では最小資料で、606は表裏に原礫面を残す。

607・608は小型の扁平礫利用の礫石錘である。

609～第153図635は礫を素材とし、磨痕、凹痕、敲打痕のいずれかの使用痕をもつ、敲磨器類である。このうち609～612は使用痕が一種の単独機能、それ以外は複数の使用痕の組み合わせからなる複合機能の石器である。609～611はやや厚みのある長円礫素材の磨石で、610は短軸方向、その他は主に長軸方向の磨痕がある。612は敲石で棒状礫のエッジ部分に敲打痕がある。

613～622は磨痕と敲打痕の二種が共存する磨敲石で、素材は613は扁平礫、614・615は長円礫、その他は棒状礫である。617・618は断面三角形のエッジを、また622は破損礫の破断面を主要機能部位とする。

623～627・631・第154図635は主に扁平礫の側面を主要機能面とする石器で、623～625はざらざらの幅広い磨面（弱い敲打面）をもつ。626・627・631・635もこれに類するが、剥離を伴いや幅狭である。その他の使用痕とも共存するが、「特殊

磨石」や「半円状扁平打製石器」と関連する可能性があり、一括した。624・625は二側縁利用で、後者はあばた状の敲打痕とも連続している。627や631の機能面は半円状扁平打製石器そのものである。635は磨製石斧からの転用品である。

626～634は凹痕のある一群である。このうち626～628・634は凹穴とは言えない深さの、単なる敲打の集中ではあるが、素材礫の端部や縁辺を利用する石器とは本質的に異なることから、これを凹痕として理解する。628～631は扁平礫を素材とし、631は石皿、634は石刀・石剣類の転用品である。多くの資料では使用痕どうしの新旧関係は不明なものが多いが、629・630は凹穴よりも長軸方向の磨痕が新しい。第154図632・633は直方体状で整形を伴う石器である。

636は砂岩製の砥石で、637～640は磨痕を持つ小型の扁平礫で、台石としたが砥石と区別できるわけではない。いずれも表裏二面利用である。

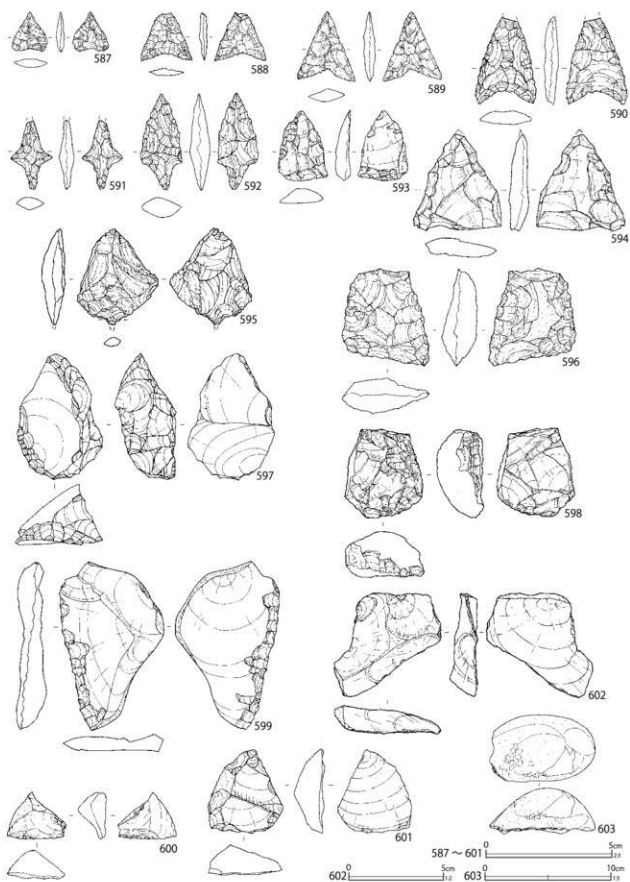
641は有緑石皿の破片で表裏二面利用である。

第155図642は石核である。643は定角式磨製石斧で隅角はかなり角張る。644は軽石製の浮子で、孔内部と上端に紐かけの痕跡がある。

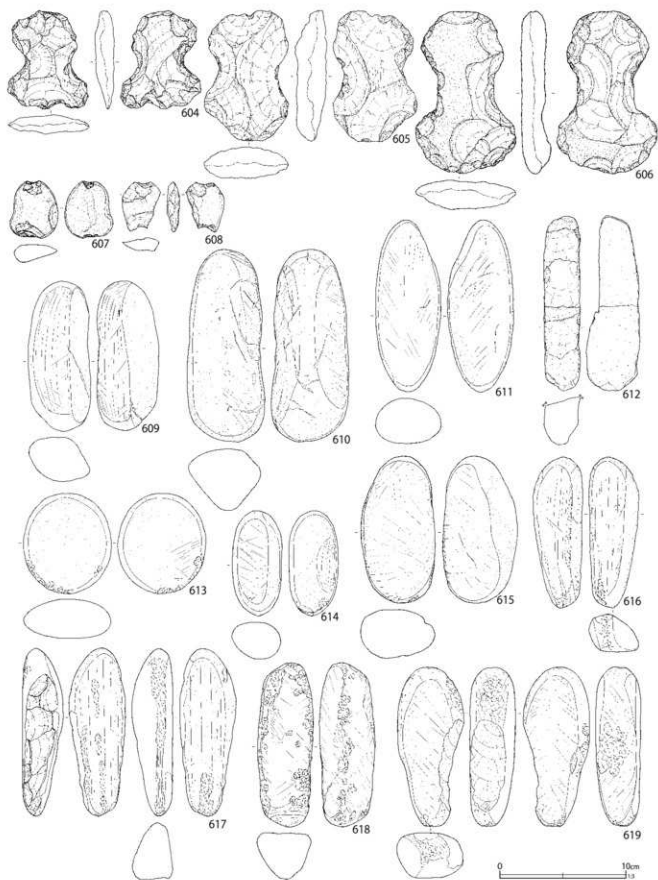
645～647石棒類で、645は小型の両頭石棒で作りは扁平である。646は小型の石棒で上部は破損している。647は石剣の未製品であろうか。片側面に剥離が連続し、研磨も進行している。

648は分割礫として報告する棒状礫で、隣接グリッドで出土したa・b2片が接合した。648bの破断面縁辺に微細剥離がわずかに見られることから、破断面縁辺を利用した敲石の、素材獲得の過程を表す石器である。調達しようと分割し、使用を試みたが、道具として本格的に機能することなく、そのまま廃棄された流れを想定できる。

649・650は同一母岩の資料で、もとは敲磨器類の石器をダイス状に分割している。ともにa・b2片が接合する。かつての磨面が残存する一方で、縁辺部に分割後の敲打痕があり、多面体の中

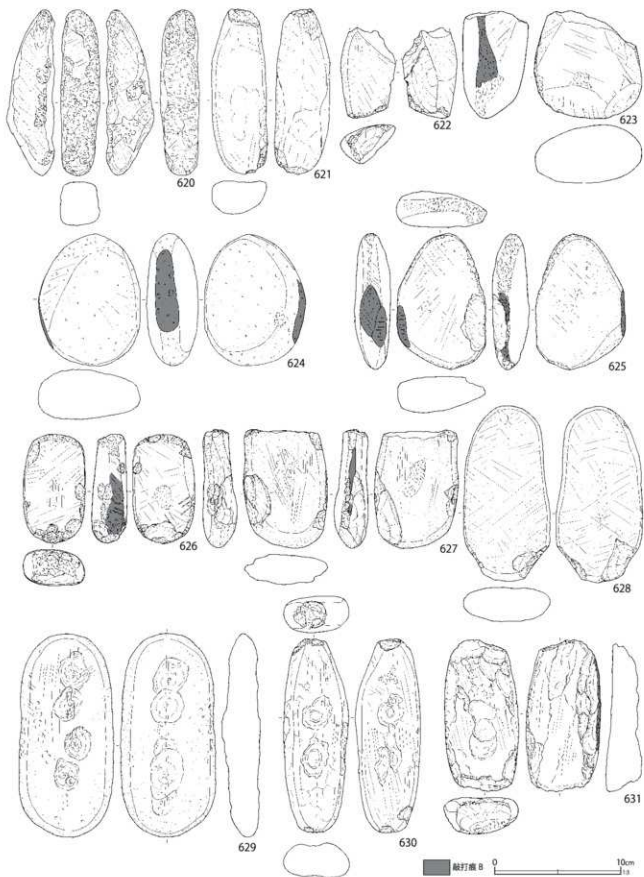


第151図 東斜面出土遺物 (21)

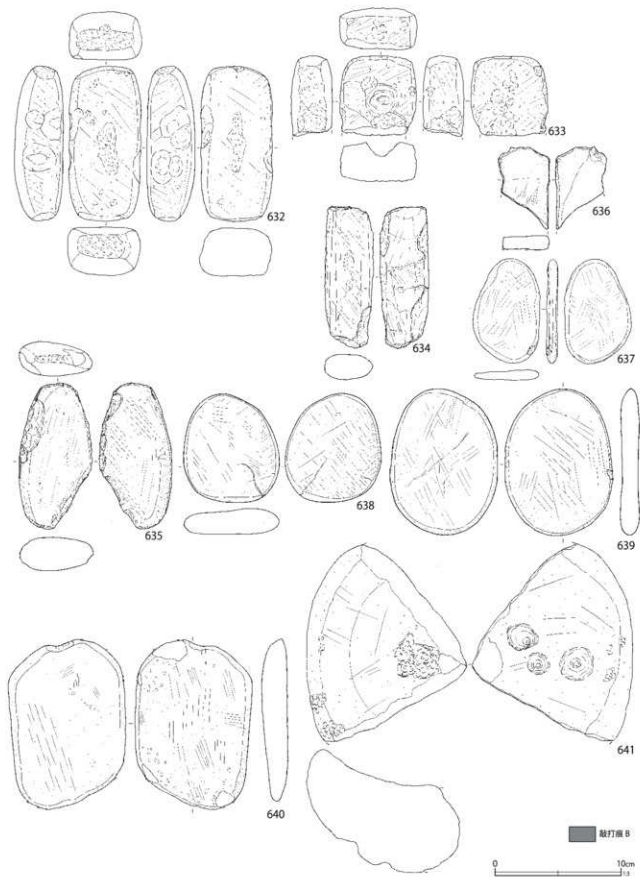


第152図 東斜面出土遺物 (22)





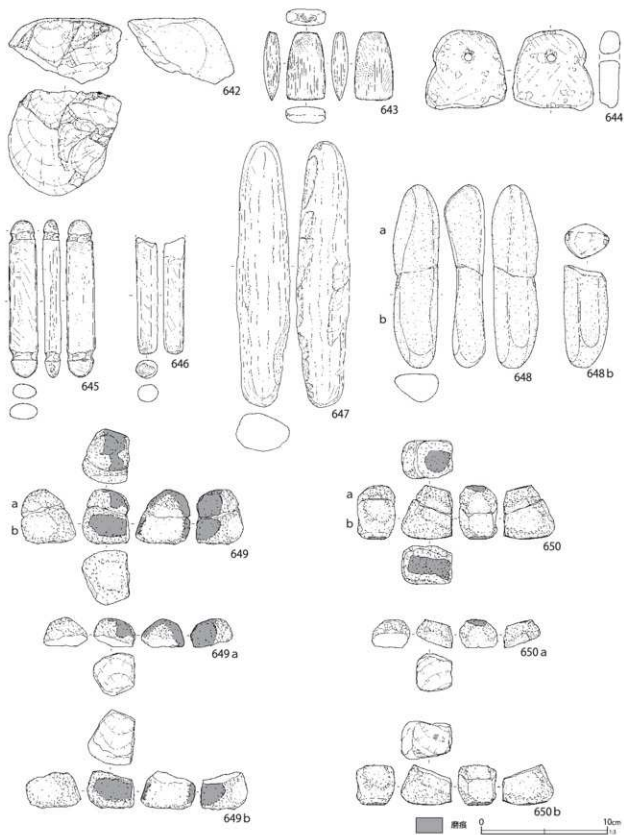
第153図 東斜面出土遺物 (23)



第154图 东斜面出土遗物 (24)

に、かつての磨痕と分割面、分割後の敲打痕の三者が共存する。分割後の敲打により、接合面に不

連続が生じている。敲磨器利用（分割）の、4点の多面体敲石（649a・b・649a・b）である。



第155図 東斜面出土遺物 (25)

## 西斜面出土遺物 (第129・130・156～207図)

第129・130図で主な出土遺物を地点別に示し、第156～207図に出土遺物を掲載した。第156～163図は復元実測した土器、第164～187図は破片、第188～192図は土器片加工品、第193～195図は土製品、第196～207図は石器・石製品類である。

**土器** 第156図1は堀之内1式の4単位波状口縁深鉢で、頸部より上の口縁部付近で括れ、無文の口縁部が外反する土器である。頸部は隆帯と沈線で区画する。波頂部から円文を押圧した隆帯が垂下し、直下に二重の弧線を配す。地文は単節LRの横位施文である。

2は縄文地に沈線と列点で文様を描出する平口縁深鉢である。口端部には沈線が巡り、小波状風の突起部には、中央に横線、左右に列点を配す。胴部には二～三本一単位の沈線で縦線、斜線、弧線のほか、列点を施す。地文は単節LRである。

3・4は地文に縄文のない堀之内式の深鉢で、器形は、胴部下半が張り、頸部が括れ、口縁部が外反する。器壁は厚く、沈線のみで逆J字状の文様を描出する。

5は頸部が括れ口縁部は外反する。また、口端部は内屈し外面に沈線が巡る。波頂部の突起に裝飾は無く、左右に円形刺突を施す。頸部は沈線で区画する。

6は球胴状に膨らむ壺または注口土器である。胴部下端に刻み隆帯による横位区画を持ち、口縁部から並行する二本の刻み隆帯が垂下し(縦位区画)、横位区画と融合する。接点には紐かけ状の環状突起を配す。胴部には二本の刻み隆帯で、下接するJ字状モチーフを描く。縦位区画から派生する刻み隆帯も、これらを構成するのであろう。区画と文様との接点の円形刺突文を約束とする。文様の施文技法から後期前葉に位置づけられる。

7～11は堀之内2式の深鉢で、7～9は口縁部、10・11は胴部と胴下半部である。7・9は口縁部に刻み隆帯と8字状貼付文を持ち、8は8字

状貼付文に代わり、刻みを施す棒状貼付文を縦位区画文として配す。7は8字状貼付文直上に二山の小突起を持ち、内面には円形刺突を施す。文様は8～10は三角形文ないしは菱形文を描出し、11は曲線モチーフとなる。7は施文具がやや太く、文様も三角形とも菱形とも表現し難い曲線的モチーフを、区切らず横位に展開する。11は接点を持たない胴部下半と底部である。胴部下半がわずかに張る器形である。

12は地文に縄文を持たない平口縁深鉢で、口縁部内面に沈線が巡る。五本一単位の櫛状工具で縦線や弧線を描出する。

13は口縁部が外傾する平口縁深鉢で、口縁部内面に沈線が巡る。文様は縄文を持たず、二本一単位の工具で上方へ払うように縦線を描出する。

14・第158図15は堀之内2式の注口土器で、14はいわゆる蕃神台類型とされるものである。主軸上に対となる大型の把手を配し、算盤玉状に張った上部に文様帯を持ち、下半は無文となる。口端部はくの字に短く外屈する。把手上部には両起点に円形刺突を持つ刻み隆帯を斜位に配す。文様は磨消縄文で胴部最大径付近を横位に区画する。また注口部や把手部を縁取り、側面中央付近で襷掛け状に描出する。底面はごぎ編みらしき編組痕が残り、外周は摩耗が顕著である。

15はいわゆる福田類型と呼ばれる注口土器で、長頸壺のように頸部が立ち上がり、体部と接続する把手を付ける。頸部は楕円形区画文を多段に配し、区画内に刺突を、区画間に縄文を充填する。最大径付近に二本沈線で横位に区画し、注口部直下には小型の、側面には大型の渦巻文を配す。既報告第457集の第583号土壘(第374図16)やグリッド(第389図176)で破片が出土する。

16・17は3単位波状口縁精製深鉢である。16は3単位に捻りのある左右非対称の突起を付す小型の深鉢で、口縁部下には刻み隆帯が巡り、波頂部直下には中央の窪み円形貼付文を配す。下位には

縄文帯が巡る。堀之内2式であろう。

17はいわゆる加曾利B2式の3単位把手深鉢で、胴部中央に括れを持つ。口端部は内屈し、突起はいずれも欠損する。文様は波頂部直下に、中央に単沈線のある括弧文で横帯文を区切っている。

18は口縁部が内湾し、最大径に有刻の横位沈線区画を施す。口縁部には捻りを加えた左右非対称の突起を配し、横位区画帯上には突起から連続する、中央の窪む円文を配す。加曾利B2式である。

19・20は口縁部に押圧隆帯を施す深鉢で、口縁部内面に沈線が巡る。縄文地に、20は横位沈線を、19では横位沈線区画内に二重の斜線や弧線を施す。19は加曾利B2式、20も同時期であろうか。

21・22は斜格子目文を持つ土器で、口縁部内面に沈線が巡る。21は口縁部の一次区画線後に斜格子目文を描出する。一方で22は、斜格子目文が横位沈線区画に先行する。加曾利B1式であろう。

23は加曾利B式に伴う紐線土器で、胴部下半が張り、口縁部が外傾する器形である。口縁部に押圧隆帯が巡り、地文にLR縄文を持ち、太めの沈線で条線風の斜線を二段に施す。

24はバケツ形の平口縁深鉢で、縄文を持たず、櫛状工具で縦位、斜位、横位と不定形に施文する。条線は、櫛歯を器面に深く刻まず浅い。

25は地文のみ深鉢で、口縁部まで内湾して立ち上がる。縄文はLR単節の横位施文である。

26は頭部が括れ、口縁部が外に開きながらやや湾曲気味に立ち上がる波状口縁深鉢である。波頂部に深いスリットを入れ、二山の突起状にし、波頂部直下に、やや高さのある横長貼付文を配す。体部に文様は無く、器面は全面ケズリ調整である。

27は胴部で括れ口縁部が外反する、小型の大波状口縁深鉢で、波頂部や瘤は剥がれている。口縁部に沿って三段の帯縄文を持つ。括れ部には並行沈線間に刻列を施す区画帯を持ち、波頂部から二本沈線を垂下し縦位区画とする。頭部文様帯には集合鋸歯状の条線文を持つ。安行1式である。

28は頭部で括れ口縁部はやや湾曲して立ち上がる安行2式の大波状口縁深鉢である。波頂部は無刻の鱗状突起を配し、波頂部と波底部に横刻縦瘤を配す。口縁部に沿って二段の帯縄文で三角形区画文を配す。また胴部上半には横位の縄文帯を二段に配し、豚鼻状貼付文を施す。括れ部下の胴部下半は、互連弧文と豚鼻状貼付文を配す。胴部下半は条線を持つ。

29~31は後期後葉~晩期前葉の帯縄文構成の平口縁深鉢で、29・30は無刻の縦長二段瘤を配す安行1式である。29の瘤上の刻みは帯状文施文時によるものであろう。30は口縁部文様帯部のみ残存し、下図のa~gの7片が接合した。このうち縦長の破片aに二次的の加工が見られ、土器片加工品(第192図686)として後述する。

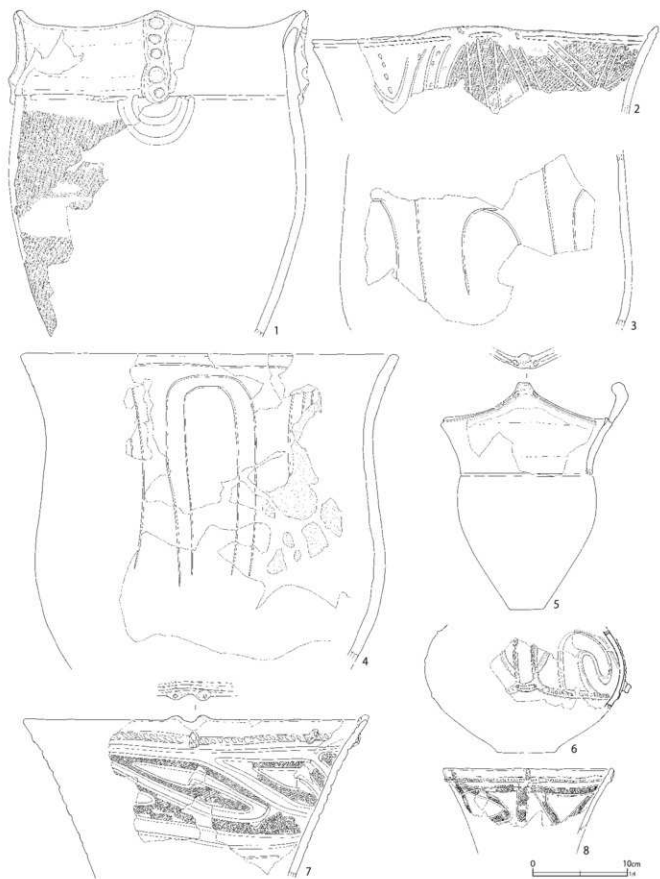
31は口縁部が内湾する器形で、三段の帯縄文を跨ぐように、有刻の縦長の瘤を配す。刻みは中央が縦刻、上下が横刻である。安行3a式であろう。

第160図32は漣状の口縁部を持つ平口縁深鉢で、器壁は薄く径は小さい。口縁部と最大径付近を横位沈線で画し、区画内は二本沈線で縦位と上下の対向弧線文を描き、各接点に豚鼻状貼付文を配す。口縁部と文様帯下にLR縄文を施文するほか、文様帯内に沈線区画とまったく一致しない縦位の帯状縄文部がある。安行3b式であろうか。

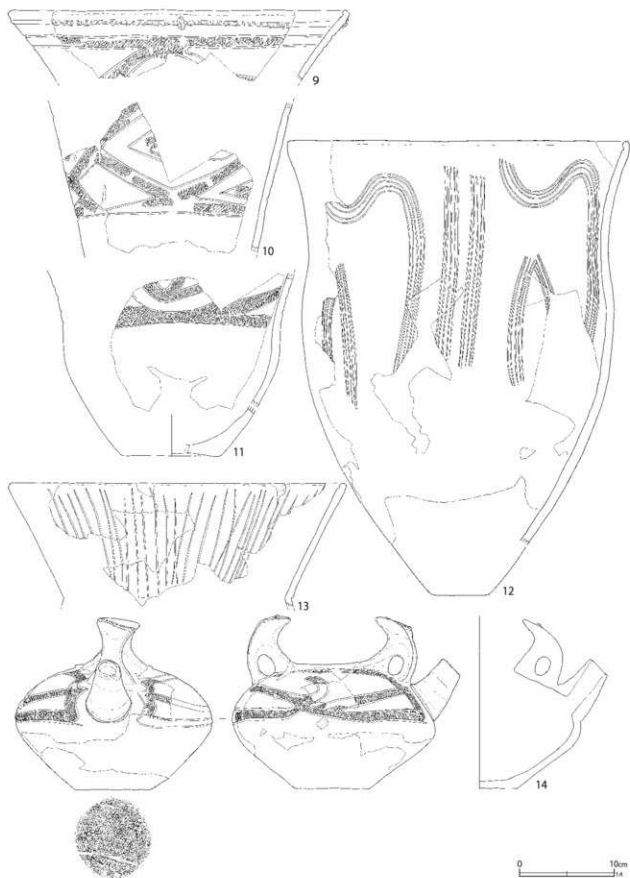
33・34は胴部中央に最大径を持ち、口縁部が大きく内湾して立ちあがる平口縁深鉢である。34は、二段の帯縄文を楕円形区画で連結し、横刻縦瘤を二段に縦列配置する。胴部下半は条線を持つ。33は安行2~3a式、34は3b式であろう。

35は胴部に最大径があり、頭部が屈曲し口縁部が短く外反する平口縁深鉢で、口縁部に低い二山の突起を付す。頭部を沈線で区画し、口縁部にステッキ状の弧線を横位に配す。安行3b式である。

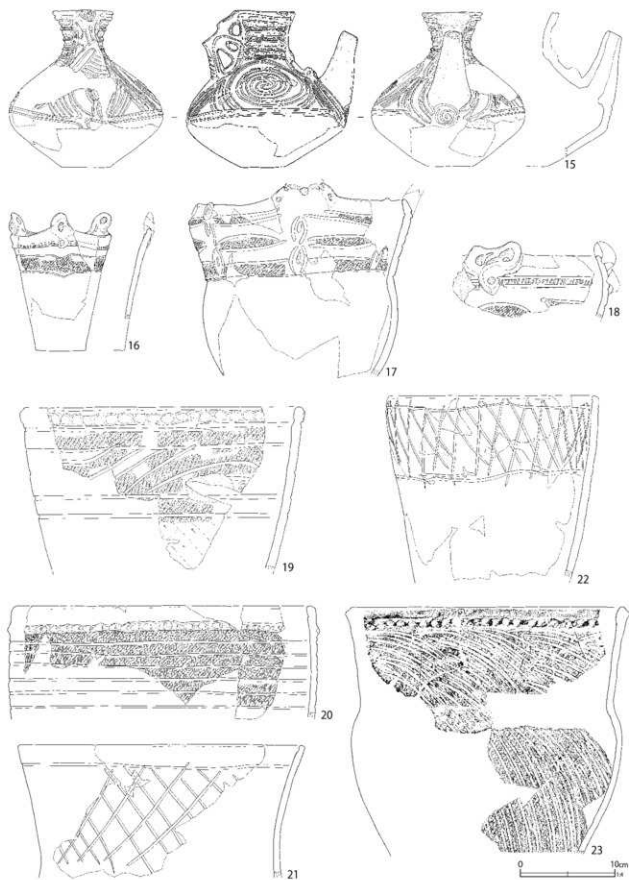
36は口縁部と胴部最大径の紐線で文様帯を構成し、縄文充填と列点を伴う半月文と、縄文を充填する斜線文を交互に配置する紐線文系の土器であ



第156图 西斜面出土遺物 (1)

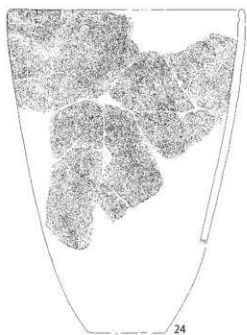


第157図 西斜面出土遺物(2)

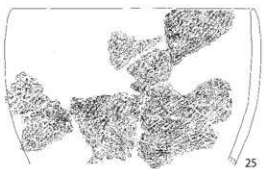


第158图 西斜面出土遺物(3)

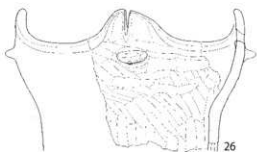




24



25



26



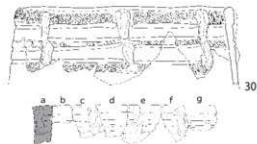
27



28



29



30



31

a (第192図686 土器片加工品)

0 10cm

第159図 西斜面出土遺物(4)

る。口端部は内側に肥厚する。37は肥厚する口縁部に縄文帯を持つ紐線文系の平口縁深鉢で、文様は、縄文充填の斜線文と充填しない沈線のみの弧線を持つ。いずれも安行3b式である。

38~40は台付鉢で、39・40は脚台部である。38は鉢部中位の縄文帯で、文様施文部を大きく二帯に分ける。上位の文様帯に、沈刻の三叉文や玉抱き弧線文を交互配置し、これに対応するように、口縁部に低い二山の突起と一山の突起を交互に配す。一方下部は、上部の三叉文の下位に帯状入組文および沈刻の対向三叉文を配す。

39は台付鉢の脚台部である。帯状入組文を基点に三叉文風の透かし穴が対向する文様構成は38にも共通する。安行3b式である。40は下向きの弧線文を横位に展開し、三叉文を弧線文2つおきに配置する。安行3b式であろう。

41・42は壺形土器である。41は胴部中位に最大径を持ち、頸部が括れ口縁部が短く外反する広口壺で頸部に無文帯を持つ。口縁部はLR縄文を横位施文し、口唇部に4単位の低い突起を持つ。胴部文は縄文地に弧線を配す。安行3b式であろう。

42は胴部が算盤玉状に強く張り、頸部が括れ、口縁部がくの字状に外反する頸の細い壺である。括れ下は無文帯と刺突文を施す縄文帯が交互に現れる。この二段目の無文帯と縄文帯の境界で顕著な段差が付き、立ち上がり角度が上下で変わる。よってこの上部を頸部、下部を胴部とみなし以下記述する。口縁部は下部に縄文を施文する。頸部と胴部上半に二段の無文帯と縄文帯が交互に巡る。胴部最大径にはおそらく5単位の横長楕円形の瘤を持ち、上部の文様帯では円形と三角形のモチーフを交互に横位展開する。最大径下は判然としなないが、弧線文が配されるようである。安行3b式であろう。

43は晩期前葉の注口土器で、口縁部から胴部下半までを刻み隆帯を横位、斜位に網状に張り巡らせ、交点に刻みを持つ瘤を配する。口縁部付近

の、左右対向する位置に円窓が開く。

44は動物意匠の浅鉢である。図の左側を正面とみなし記載する。上面観は楕円形で、正面と両側面に突起を付す。正面側は、鱗状に前方へ突き出す突起と、上部へ向かう突起(欠損)の二叉に分かれ、頭部を連想させる。前方の鱗状突起には円窓が開き、内外面に弧状の沈線を描出する。また左右の口端部には鱗状の、刻みを持つ低い半円状の突起を付し、口縁部側面には、楕円形区画を横位に連ね、これに沿って有刻隆帯を前後側に付す。全面に無節L縄文を施文する。晩期前葉であろう。

45は小型の平口縁深鉢で、口縁部はわずかに肥厚・内湾する。文様は沈線のみで口縁部と胴部に横位区画を、また区画内に楕円文を横位に連ねる。色調は灰白色で、51とともに異質である。姥山系の土器か。

46は胴部に最大径があり、頸部が屈曲し口縁部が短く外反する深鉢である。口端部は指頭押圧が残り、内面と外面の押圧位置を交互にずらすことによって小波状となる効果を狙っている。文様は沈線のみで、頸部と胴部に区画を持ち、胴部区画内に入組文を配す。晩期前葉~中葉と見られる。

47は口縁部の内湾する平行縁深鉢である。口縁部を沈線で区画し、胴部に弧線ないしは斜線を配する。条線は無く、最終調整はケズリである。

48は肥厚する口縁部が内湾する紐線文土器で、口縁部を沈線で区画し、直上に角頭状工具による列点を配す。最大径付近を横位に区画し、内部は列点を伴う弧線文と斜線文を交互に展開する。条線は消失し、最終調整はケズリである。

49は肥厚しない口縁部が内湾し、口端部付近でわずかに短く外反する平口縁深鉢である。胴部最大径付近に横位の沈線区画があるが、口縁部側は無く解放している。文様は、刺突を伴う斜線文と弧線文を交互に繰り返す。施文具は細い棒状工具である。

50は肥厚せず先細る口唇部を持つ内湾器形の平口縁深鉢である。同上半部に、二本の並行沈線による横位区画を持ち、内部は、刺突を伴う斜線文で区切り、上接する弧線文を配す。

51はわずかに肥厚する口縁部がかなり内湾する平口縁深鉢である。剥落しているが、瘤ないしは貼付文が、下部の豚鼻状貼付文と縦列配置していたのだろう。口縁部には沈線が横走り、貼付文手前で折り返し、楕円文となる。

52は台付鉢の脚部で、円文内に方形透かし孔を持つ。文様は刺突を伴う二種の弧線文（下接する弧線文、上向きの弧線文）を交互に配す。以上は、概ね安行3c式を中心とする。

53は角が取れた隅丸方形の角底土器で、器形は全体的に曲線基調である。四隅に単節LR縄文を施文する縦位区画を配し、区画間を縄文施文の弧線文で横位に繋げている。底面は外周がきれいに摩耗し、開削土器集積層出土の角底土器（第98図12）の様相と似る。晩期前葉であろう。

54は皿で、内外面を丁寧に磨く。

55は丸底の土器で、底部のみのため器形は不詳である。外面は乾燥のかなり進行した段階で水平方向に削っている。晩期中葉であろうか。

56～59は後期後葉～晩期前葉頃の条線文土器ないしは紐線文土器である。口縁部は56が直立、57はわずかに外傾、58・59は内傾気味である。56・57の条線は斜位ないしは縦方向で、胴部区画で区切れない。安行1式であろう。58・59の条線は横方向で、短く弧状に区切る。安行2式から3a式であろう。

56は口縁部と胴部最大径付近に、沈線区画と列点による区画帯を持つ。口縁部沈線区画の下位には、列点施文に対応する工具痕がある。58の口縁部はさほど肥厚しない。

60～65は晩期前葉～中葉期の、砲弾形の有段口縁粗製深鉢である。口縁部は粘土帯を外側に被せ、指頭で押圧する。器形は、上半部が張るもの

(63～65)、そうでないもの(60～62)がある。器面調整は多くがケズリで、胴部中位までは縦方向（下から上が多い）で、胴部上位は斜方向→横方向となるのが一般的である。胴部上半に指頭押圧を残すものも多い(60・61・第217図65等)。多くの土器で粘土紐の輪積痕を残す。

66も有段口縁粗製深鉢に類する土器と見られるが、明瞭な段を持たず、器面調整のケズリが尠達せず粘土紐輪積痕を明瞭に残す点が異なる。

67～71はその他の無文土器である。67は外傾し、器壁は薄い。輪積痕が明瞭に残る。68は口端部にB突起状の二山の突起を2個配す。69・71は頸部が括れて口縁部が短く外反する器形である。

70は口端部を面取りし、頸部で強く屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。内面に稜を形成する。

72は小型の無頸壺のような器形で、口縁部付近で内側に屈曲する。口縁部に円窓が開く。

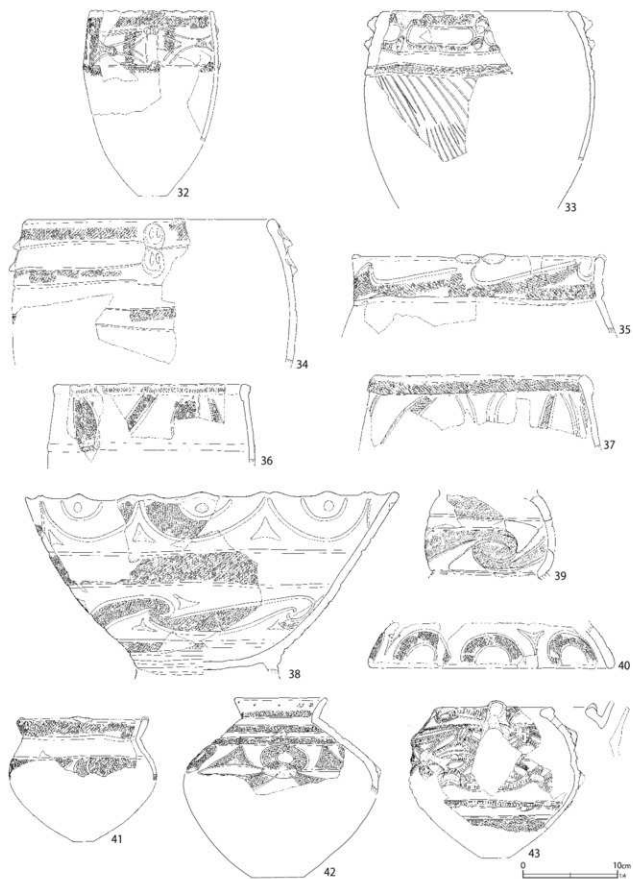
第164図73からは破片である。73～76は早期の土器群で、73は早期前半の夏島式の尖底土器の底部である。74は野島式で、沈線のみで文様を描く。本書対象資料では、数片が見つかるのみである。75・76は早期後葉の条痕文土器である。75の外面は縦方向、内面は横方向の条痕がある。76は尖底の底部である。

77・78は前期後葉の諸磯c式である。貼付文系土器の口縁部破片で、同一個体である。

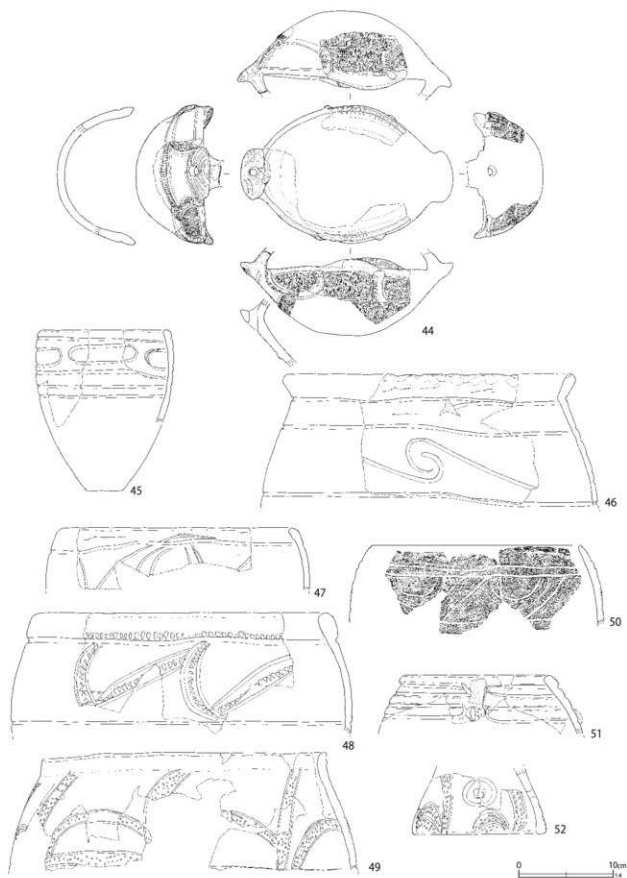
79は中期初頭の五領ヶ台式である。口端部を面取りし、内面には稜を形成する。

80・81・85は中期前葉阿玉台1b式で、82・83は阿玉台II式である。80は波状口縁の波頂部で、前にせり出す突起が頸部の刻み隆帯まで延びる。口縁部文様帯は、角押文で楕円形区画を構成する。85は底部である。82は口縁部が肥厚し、直下にひだ状圧痕を施す。83は2列の角押文で施文する。

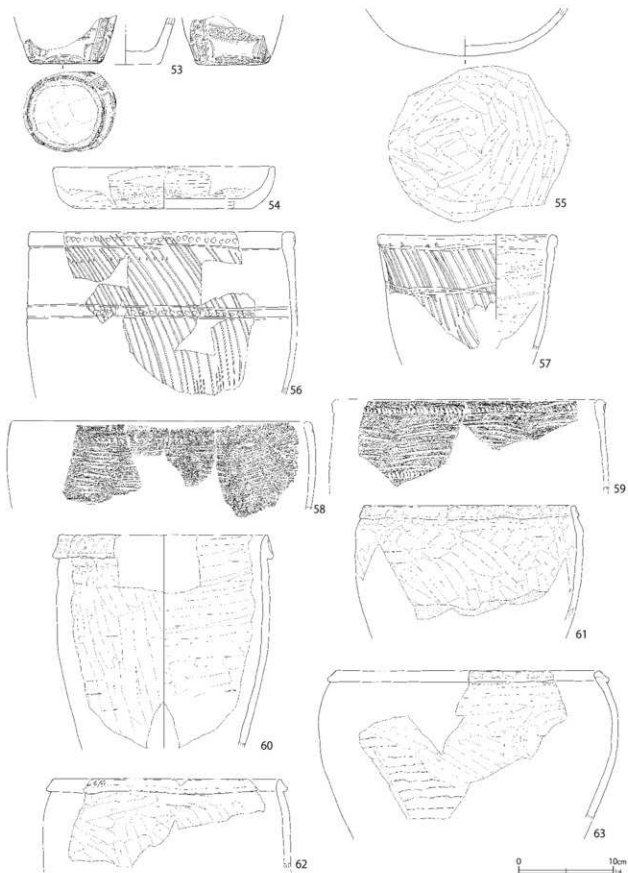
84・86～90はキャタピラ文と三角押文を施文する新道式で、91～93は幅広の爪形文を施文する藤内式である。86～90は口縁部から胴部の破片で、



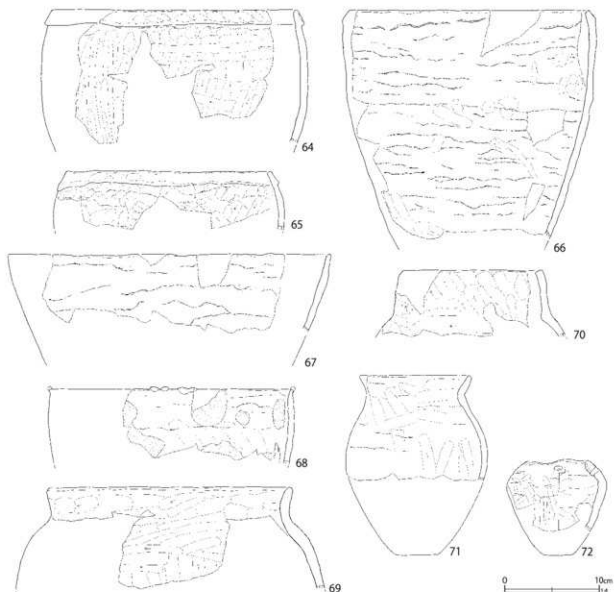
第160图 西斜面出土遺物(5)



第161图 西斜面出土遺物(6)



第162图 西斜面出土遺物(7)



第163図 西斜面出土遺物(8)

87・88は同一個体である。口縁部は外側に開き、強く内湾する。口縁部文様帯には、刻み隆帯で弧状や渦巻状のモチーフを配し、隆帯脇に三角押文を沿わせ加飾する。口縁から胴部にかけては、地文にLR縄文を施文する。89・90は口縁部区画にキャタピラ文と三角押文を併施文している。

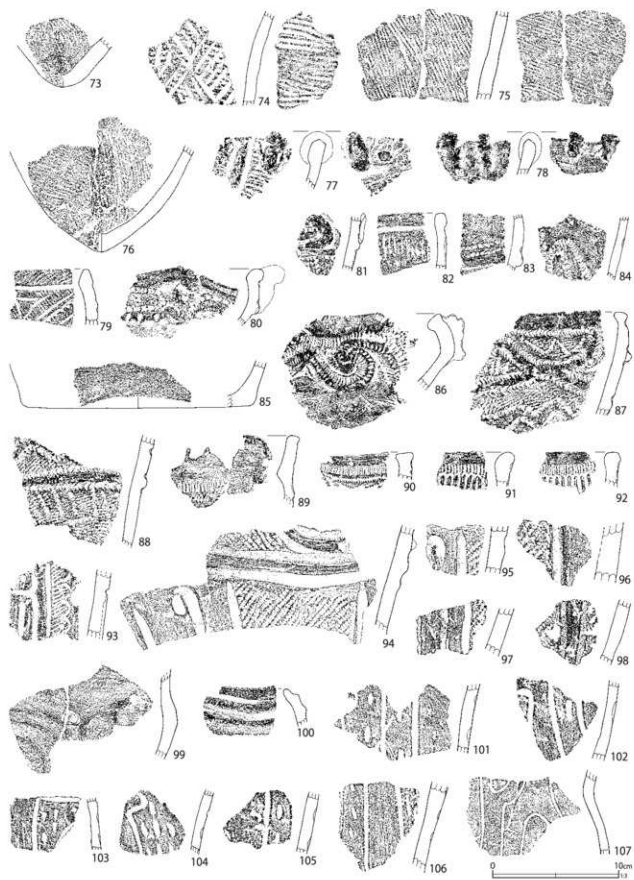
91～93は北陸系の要素を持つ土器群で、91・92は幅広の爪形文と集合沈線文を併施文する。93はパネル状区画文に類する縦長区画文を施文する。

94～100は中期後葉加曾利EⅢ式である。94は口縁部文様体から胴部付近で、磨消帯に蕨手状懸垂文を垂下する。99は口縁部が無文となる壺形土

器であろう。頸部は幅広の微隆起帯で区画し、胴部はここから派生した微隆起帯で逆U字状文ないしは渦巻文を描出するものと思われる。頸部には円文を配する。100は瓢形土器の口縁部であろう。

101～107は後期初頭の称名寺2式である。沈線区画内に縄文を持つものではなく、列点を充填するか、区画のみのものである。101・102・105では列点が単列で、103・104では複列である。

第165図108～166図141は地文に縄文を持つ堀之内1式の波状口縁深鉢の口縁部である。108～116は波頂部ないしは突起部で、108～111は半円ないしはそれに近い突起で、端部に沈線や凹線を持



第164图 西斜面出土遗物(9)



つ。108は沈線の両起点に円形刺突を伴い、網取式のC字状モチーフを彷彿とさせる。110も一方の起点に円形窪み、他方には円文を伴い、共通の意識が窺える。108・112は円窓を、114では対の円窓、114では楕円形の窓を、また110は内面に円文を持つ。113は波頂部から隆帯を垂下し、116は波頂部下に単位文を描く。

117~123・125・126は平口縁深鉢の口縁部で、いずれも口縁部に一本ないしは二本の沈線が巡る。118は沈線幅が広く凹線状となり、断面形はS字状である。シャープな作りでやや異質である。器形は外反(119)、外傾(124)、内湾(122・123)、口縁部付近で括れて外反(121・125)等の変化がある。文様は描出には、単沈線(117)、二本沈線(119~121・125)、多重沈線(124)等がある。124は波状口縁で縦位の刻み隆帯が垂下する。121は第729号土壌出土資料(第32図28・29)と同一個体である。

127~129は小型の作りで口端部が外側へ短く屈曲する。浅鉢であろうか。127・128は同一個体である。129は円形貼付文と8字貼付文を縦列に配する。130は前述の118と類似し、口端部が凹線状で、断面形がS字状となる。131は口縁部に沈線を施し、無節Rを全面施文する。

132・133は波頂部より刻み隆帯ないしは押圧隆帯が垂下する。134も小波状部に、132同様のモチーフを描く。直下には8字状貼付文を配す。

第166図135・136は無文の口縁部が外反する土器で、135は胴部に蛇行懸垂文を描出する。第156図1と同一個体である。136は括れた頸部を三本沈線で横位に画す。円形刺突を起点に二股に分かれる弧状の懸垂文を描出する。

137~142は胴部破片である。137は三本一単位の施文具で懸垂文と蛇行懸垂文を描出する。138は二本の並行沈線間に蛇行文を描出する。139は沈線文様内を不完全に磨り消している。140は二本一単位の施文具を用いる。頸部を多重沈線で区

画し、口縁部から垂下する刻み隆帯の末端に円形刺突を施す。胴部文様はこれを基点に重線文等を描出する。141はいわゆる刻み隆帯、142は連鎖状隆帯二本を垂下させる。142は幅15mm程度の櫛状工具による短い条線文を地文とする。起点に円形刺突を伴うC字状モチーフを持つ。

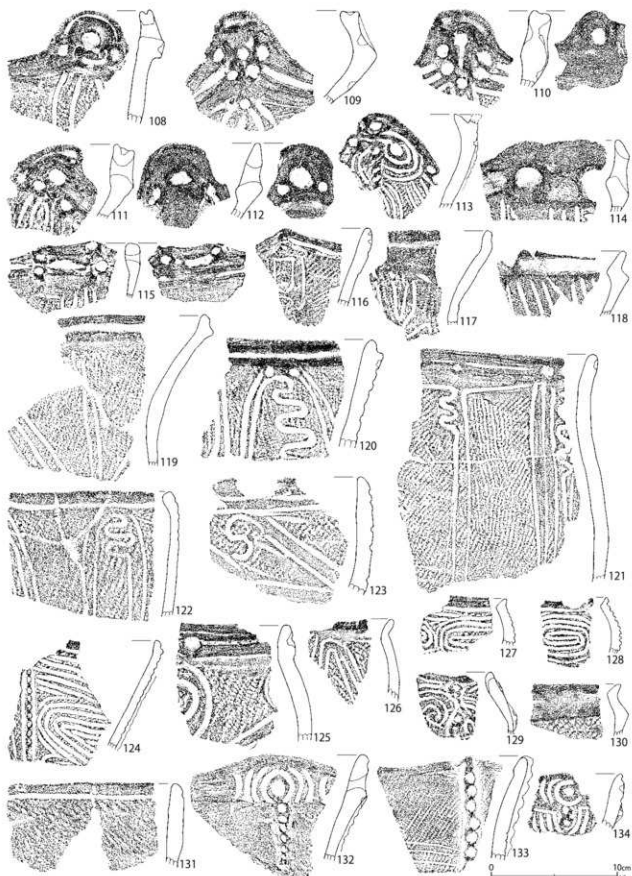
143は頸部が括れ、無文の口縁部が外反する土器で、頸部には刻み隆帯が巡る。口縁部でX字状に交叉する刻み隆帯が、頸部の刻み隆帯と連結するのであろう。連結部には円形刺突を配する。

144は括れた頸部に低隆帯の渦巻状モチーフと方形区画を持ち、区画下にはLR縄文を施文する。

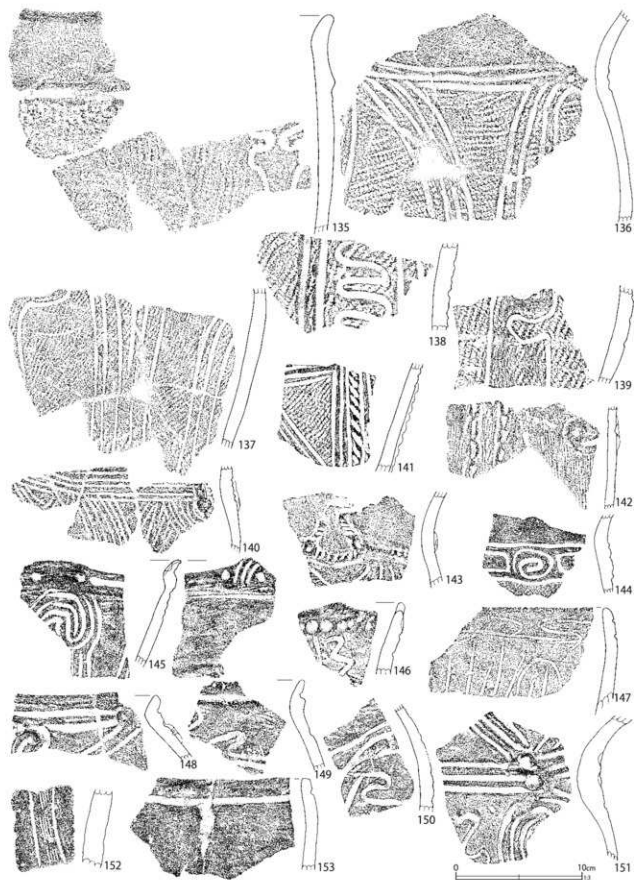
145~153は地文縄文の無い堀之内1式の深鉢である。145・146は波状口縁、147・148・153は平口縁深鉢である。145は低い半円状の波頂部を持つ。外面には1対の円形刺突を、内面には対の円形刺突間に三本沈線を配す。口端部には沈線が巡り、波頂部下には三本沈線を一組として文様を描出する。146は口縁部に円文を連続させ、口縁部沈線に置き換えている。波頂部下に蛇行懸垂文を描出する。147は細沈線で文様を描出する。口縁部は素口縁で横位の沈線区画がある。逆U字状文や、下部から上方へ払う縦線を描出する。

148・149は口縁部が短く外折する壺形土器で、148は二本一単位の沈線、149は単沈線で頸部を区画する。148は起点に円形刺突を伴うC字状文を持つ。149と150は同一個体で、太沈線で蕨手状文を描出する。151は頸部で括れ口縁部が外反する土器で、頸部に三本一単位の沈線区画と二段の円文を持つ。この円文を基点に、胴部には対向する括弧状文や蛇行沈線文を描出する。

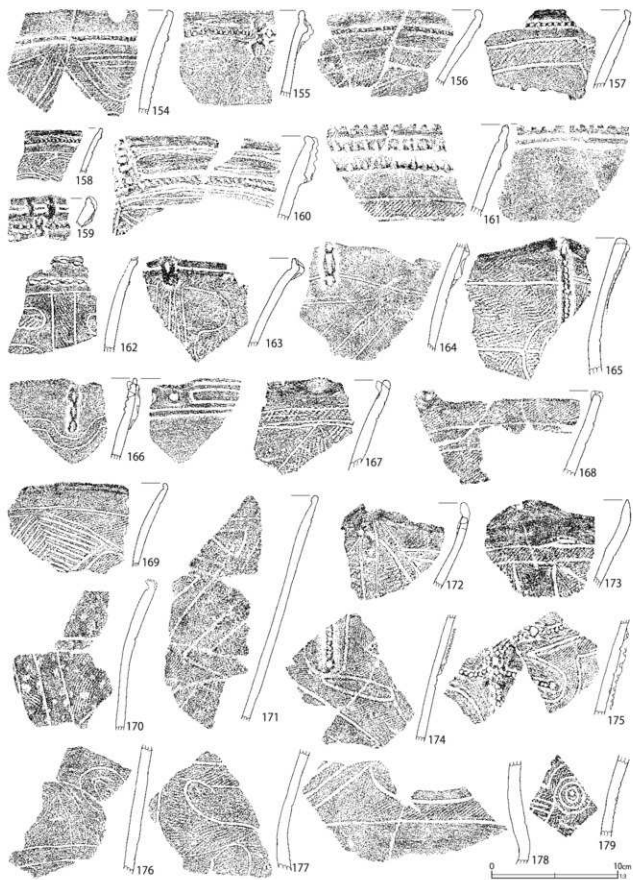
第167図154~171は口縁部が外反し、端部が内屈する堀之内2式の口縁部である。口縁部には刻み隆帯を持つものが多いが、これが欠落するものや二段になるもの(160・162)、隆帯より上位を加飾するもの(158)、文様を持つもの(160)等さまざまな変化がある。隆帯上の刻みは、垂直方



第165图 西斜面出土遗物 (10)



第166图 西斜面出土遺物 (11)



第167图 西斜面出土遺物 (12)

向の刺突(165)、工具の腹を押圧(154・157)のほか、斜位(160)、縦方向(161)、横位の列点(単沈線)状(162)等様々である。

8字状貼付文を持つ場合、これが下位の文様帯の起点となることが多いが、164のようにこれを意識しないものもある。166や167では口端部を内側に折り返し、ここが下位の文様の起点となっている。166は内文を持ち、161は口縁部内面に二本の沈線が巡る。文様は磨消縄文による幾何学文を基本とするが、全面に縄文を施文するもの(165)や施文域を守らないもの(163)もある。169は磨消縄文の区画内を多重沈線で充填する。

172・173は小波状部が内湾する器形で、171までの外反するバケツ形と一線を画す。172は波頂部下に焼成前の円孔を開け、これを下位の文様の起点とする。地文は無節Lである。173は波長部下に幅広の磨消帯を縦位に配す。

174~179は堀之内2式の胴部である。174は文様が幾何学文とはならず独特である。175は刻み隆帯がタコ足状に6方向へ延びる。176・177は曲線的なモチーフを持ち、177は無節Lを充填し、176は縄文施文がない。178は胴部下半が張る器形である。179は磨消縄文と多重沈線を組み合わせる。中央に円形刺突を持つ同心円文を施文する。

第168図180~191は外反し、口縁端部は内屈し、口径に対する器壁が薄い一群で、器形や口端部の作りから、堀之内2式に伴うと考えられる。平口縁が多いが、182は小波状となる。180は口端部に沈線が巡る。183・186・187は口縁部下に横位の沈線区画を持ち、その他はこれが無い。文様は、180・181は沈線懸垂文や逆U字状文を施文し、部分的に縄文を持つ。184は下方から上方へ払う縦線で、二種以上の異なる施文具を用いる。186は幅15mm程度の櫛状工具である。横位区画のあるものは文様を区画から派生させる。183は上向きの弧線、186は縦位区画文と上下対向の弧線文、187は縦に折り返す蛇行文等、いずれも横位区画

を起点とする。188は縦位区画間を横位沈線で充填する梯子状文を描出する。189~191は地文のみで、189・191はLR縄文、190は無節Lである。

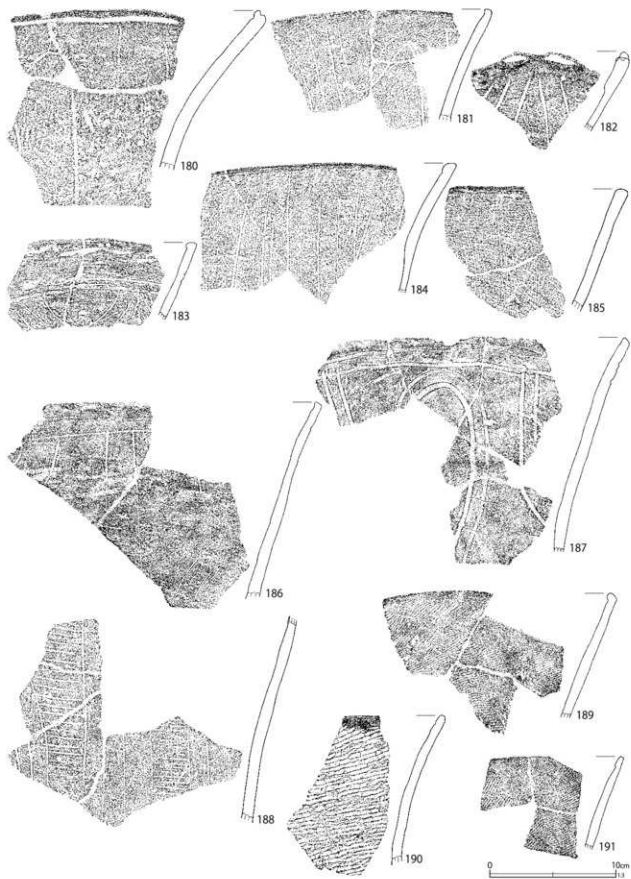
第169図192~208は堀之内式期の深鉢以外の土器を一括した。192・193・195~198は浅鉢、194・199・200は壺、201~208は注口土器である。

192・193は内屈する口縁部に太沈線で文様を描出する。体部に縄文はない。196は波頂部に捻りのある突起の付くタイプと見られ、強く屈曲する口縁部に縄文を充填する楕円形区画を施文する。いずれも堀之内1式であろう。195は器壁が薄く小型で、口縁部が内屈し、体部にも沈線で文様を持つ。197は口縁部が外反し、内文を上に向ける浅鉢で、口端部下端に刻列が回り、縦位の刻み隆帯が派生する。内文は並行する二本の刻み隆帯が回り、この間を弧状の刻み隆帯で連結する。198は浅鉢で、8字状貼付文を持つ刻み隆帯の内側に、中央に円文を配す同心円文と渦巻文を縦位に配す。同心円文の弧線末端は円形刺突を持つ。

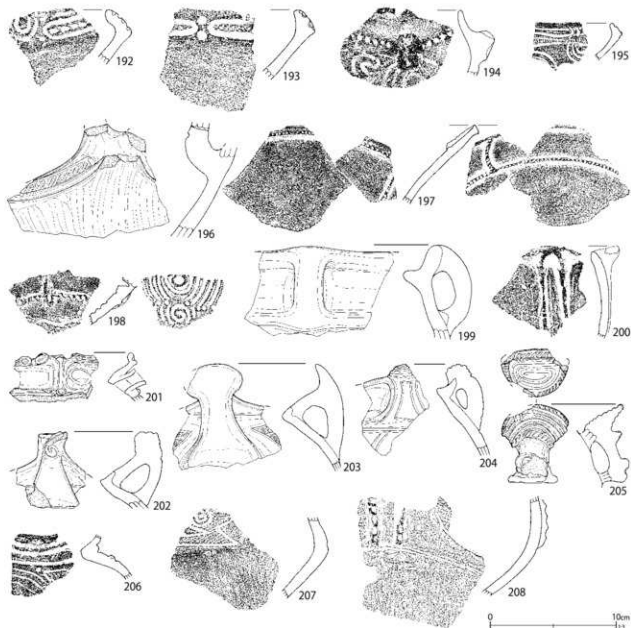
194は頸部に円形刺突列を持つ隆帯が回り、口縁部が短く立ち上がる器形で、最大径は頸部にある。隆帯上には、8字状貼付文の代替と見られる貼付文(上に左右二つの突起、下部に円形貼付文)を付し、これを基点に対向する重弧線を配す。

199は口縁部が外反し、内部には蓋受けがある。頸部に断面三角形の隆帯が回り、口縁部と連結する橋梁状把手を配す。長竹遺跡第783号土壺(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018)に類例がある。200は無頸壺らしく、体部は球筒形である。口縁部には外側へ張り出す突起から二本の隆帯が垂下する。突起には紐掛け状の円孔が開く。

201は頸部がくの字に強く屈曲する注口土器で、口唇部には沈線を巡らせ、円形刺突を施し、刺突部の口唇部が波状となる。頸部に短い注口部と、隣接して、起点に円形刺突を伴う沈線を施す橋状把手を付す。胴部側には刻み(細かい竹管状工具の刺突)隆帯が巡る。202~205は注口土器の



第168图 西斜面出土遺物 (13)



第169図 西斜面出土遺物 (14)

把手部で、202は把手上部に平坦な突起を持つ。端部の渦巻文がS字状に下方へ延びる。

203・204は把手上部に立体的な同心円文状の突起を持つ。把手部と胴部に沈線で文様を描出する。

205は把手上部に平坦な突起を持つ。突起縁辺には矢羽状の細沈線を施し、上面には渦巻文を施す。突起外面は多重の沈線が巡り、把手中央は矢羽状の細沈線を施した隆帯が巡る。

206は口縁部がわずかに欠損する。頸部直下から水平に近く胴部が張り、胴部は微隆起線や磨消

縄文、円形刺突を持つ。

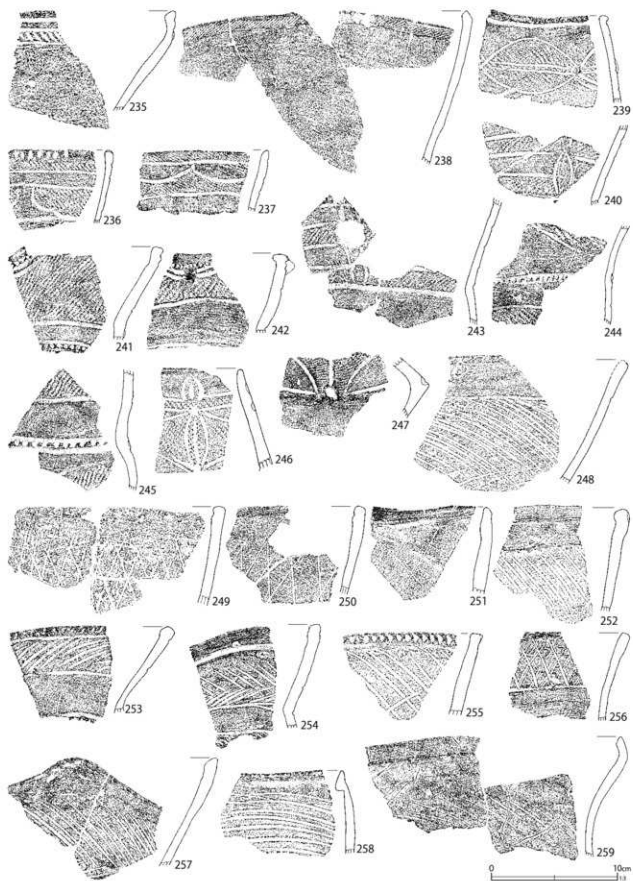
207・208は注口土器で、207は胴部がくの字に屈曲し、208は球胴形である。ともに磨消縄文を持ち、208は押圧のある二本の隆帯が垂下する。

第170図209～218は横帯文構成を持つ加曾利B1式の深鉢である。209～212・214～216は内文を持つ。209・210の内文の沈線間には刻みを持つ。210・215・216は口縁部内面に段が付き、円形刺突が巡る。211は3単位波状口縁深鉢で、捻りのある非対称の突起が付く。212は口唇部に細かい



第170图 西斜面出土遗物 (15)





第171図 西斜面出土遺物 (16)

刻みを持ち、漣状となる。内面には三本の沈線が巡る。215の外側は二本の単沈線状の段違い区切文を施す。217・218は口縁部内外面に段が付き、横帯文間に縄文を施す。218は口唇部と外面有段部に刻みを持つ。

219は波頂部に、上方が4つの瘤状となる突起を持つ。瘤の中央および内外面の三方に円形刺突を伴う。外面の横帯文には、突起直下に( )状の、その他には単沈線の区切文がある。口縁部内面に段が付き、突起直下のみ単沈線状の刺突を施す。220は波状口縁深鉢で突起が剥がれている。横帯文の区切文は、二本の単沈線状と下段に「の」字状区切文を持つ。また、波状口縁下に「の」字状文から変形した三角形の区画文を持つ。221は山形の波状口縁の内面に沈線を持ち、波頂部に括弧文を施す。また外面の波頂部には互い違いの括弧状区切文を持つ。

222～225は加曾利B2式の3単位把手の波状口縁深鉢である。222は口縁部がくの字に屈曲し、外面に縄文施文の区画帯が巡る。223・224の区画帯の刻列は、前者が押引き状、後者が刺し引き状である。226は口縁部に押圧を伴う区画帯が巡り、上部に耳状の貼付文を持ち、直下に区切文状の沈線が延びる。

227・228は口縁部に二山の突起を持ち、外面に縄文のみを施す。突起内面に円文を配し、口縁部内面に沈線が巡る。229は沈線のみで、地文はなく最終調整は粗いケズリである。

230は口縁部に横位の条線を施し、下部に連弧状の磨消縄文を施す。

231は波頂部に押圧隆帯を垂下する曾谷式の波状口縁深鉢である。口縁部に沿って縄文を施し、三本の沈線区画を施す。

232は曾谷式の平口縁深鉢で、口縁部は外反し、無刻の瘤と縄文帯を形成する。口縁部下に連弧状の磨消縄文を配す。

233・234は口縁部がくの字に短く屈曲し、下端

部は外側へ開くことから、胴部の張る深鉢か曾谷式の注口土器の上部であろう。ともに口縁部文様帯は二本沈線で区画し、前者は単節LR、後者は無節Lを施す。

第171図235は外反し口縁部で屈曲し上方に立ち上がる。口端部は内削ぎで、口縁部に刻列のある区画帯を持つ。236・237は磨消弧線文を持つ小型の深鉢で、236は口唇部に刻列を施す。238は内屈した口端部に縄文を施す。239は口縁部が内傾する平口縁の鉢ないしは深鉢である。口端部は外屈し沈線が巡る。連弧状の磨消文を横位・上下に展開し、接点に小瘤を配す。曾谷式であろう。

240・243は胴部が括れ、上半が外傾する加曾利B2式の深鉢で、横帯文は磨消部を持ち、( )状の区切文を持つ。

241・242は口唇部に刻列の巡る波状口縁深鉢で、胴部は括れ無文帯を持つ。241は無文帯下に刻列のある区画帯を持つ。242の波底部には瘤を付す。口縁部は肥厚して内屈する曾谷式であろう。244・245も括れた胴部に刻列のある区画帯を持つ。244は上方、245は下方に連弧状の磨消文を持つ。

246は内傾する深鉢で、口縁部と胴部に対弧文を持つ。247は胴部が屈曲し、連弧状の磨消縄文を持つ大森タイプの加曾利B2式の深鉢である。

248は台付鉢であろうか。体部に矢羽状の斜線文を持ち、口端部に縄文を施す。

249～251は加曾利B1～B2式の斜格子目文土器である。249・250は口縁部内面に沈線が巡る。

252～262は斜線文系の深鉢である。252は口縁部が外側に肥厚し、内面に幅広い沈線が巡る。253・254は胴部が括れる波状口縁深鉢で、253は口縁部が肥厚し、端部に刻列を持つ。口縁部には斜線を施す。254は口端部の内外面に沈線が巡り、外面は括れ部の無文帯を挟み上下に矢羽状沈線の施される構成だろう。256は胴部に無文帯を持ち、口縁部に斜線文を施す平口縁深鉢である。

257～第172図260・262は体部に斜線文や弧線

文、ないしは矢羽状沈線のいずれかを施文する曾谷式の深鉢で、259は平口縁、その他は波状縁である。257・259は端部が内削状、258は折り返しが明瞭な段を持つ。260は口縁部に沿って縄文帯が巡る。261は斜格子目文を持つ平口縁深鉢である。

263～265は口縁部に押圧隆帯の巡る紐線文系の平口縁深鉢で、265は押圧隆帯が二帯である。体部に縄文を施文し、口縁部内面に沈線が巡る。263は階段状、264は刺切り状の沈線による区切文を持つ。加曾利B1式である。265は幅広い横位沈線区画内に弧線文を配す加曾利B2式である。

266・267も縄文地に斜線、弧線を描出する深鉢である。267は口縁部内面に深い沈線が巡り、口唇部に刻みを持つ。加曾利B1式であろう。

268・269は口縁部に押圧隆帯が巡り、体部に縄文を施文する。268は隆帯から上方に、269では下方に、縦位の隆帯が延び、最大径付近の紐線へと接続する。立ち上がりの具合がやや異なるが、同一個体である。加曾利B2式であろう。

270・271は口縁部に押圧隆帯が巡り、体部に地文縄文と条線を施文する、加曾利B2式の紐線文土器である。

272・273は地文縄文のみの深鉢である。

274～第173図290は加曾利B式に伴う鉢ないしは浅鉢である。274は口唇部が先細り、沈線下に刻列を持つ。275は段違いの区切文を持つ。縄文帯と磨消帯を交互に配する。276は横帯文を九十九折れ状に折り返す。加曾利B1式である。

277・278・280は縄文帯と磨消帯を交互に配す鉢で、277は口縁部外面に段を持ち、横線以外のモチーフを持つ。加曾利B2式になろうか。

279・281は口唇部に平坦面を持つ鉢で、279の口縁部外面にはための沈線区画と縄文を施す。281は体部に磨消縄文を描出する。加曾利B3式か曾谷式になろう。

282・283は頭部最大径に刻みのある横位区画を持つ鉢で、前者は区画が二段となる。口唇部には

斜位の刻みを施す。加曾利B2式であろう。

284～第173図288は突起を持つ加曾利B2式の鉢類である。284は中央の窪む円形貼付文、285は頭部逆U字状の貼付文を配す。285は刺突列のある区画帯を持つ。286・287は縦列の楕円形貼付文を口端部から半円の突起状に配す。ともに口縁部に縄文を施文し、最大径付近に刺突のある区画帯を持つ。288は貼付文から頭部の屈曲部まで隆帯が垂下する。

289・290は内文を持つ浅鉢で、289の口唇部外面に沈線はあるが、外面に文様は無い。加曾利B1式である。289は横帯文に細かい刻みを施す。

291～297は体部に斜線文を施す鉢類で、296を除き、屈曲部に有刻の区画帯を持つ。291は加曾利B3～曾谷式の台付鉢で、口縁部が大きく外反し、口縁部にも斜線文を施す。292は前述の286・287と共通する貼付文を持つ土器で、口縁部からは半円の突起状となる。貼付文は円+楕円を縦列に配し、窪みは「i」字となる。293は突起も含む端部のみに無節Lを施文する。294・295は横位区画で屈曲し、297は弱く、296は内湾する。

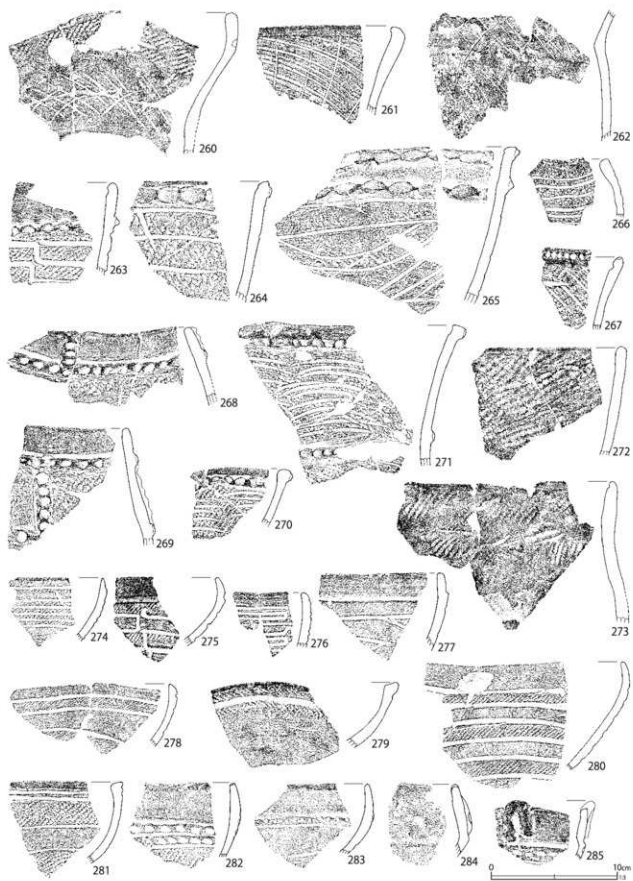
298は口縁部が肥厚し、横位沈線を多条に施文する鉢である。299は半円形の大型の突起を持つ。突起の内面には円文を施す。体部を区画する有刻の隆帯が上方に舌状にせり上がり突起とつながる。隆帯上端のみ縄文を施文する。曾谷式であろう。

300～306は加曾利B式の浅鉢で、300・301は内文と口唇部に刻みを持つ。口縁部内面の段部に刺突列が巡る。302～306は無文の浅鉢で、305は口唇部に刻みを施す。調整はいずれもケズリである。

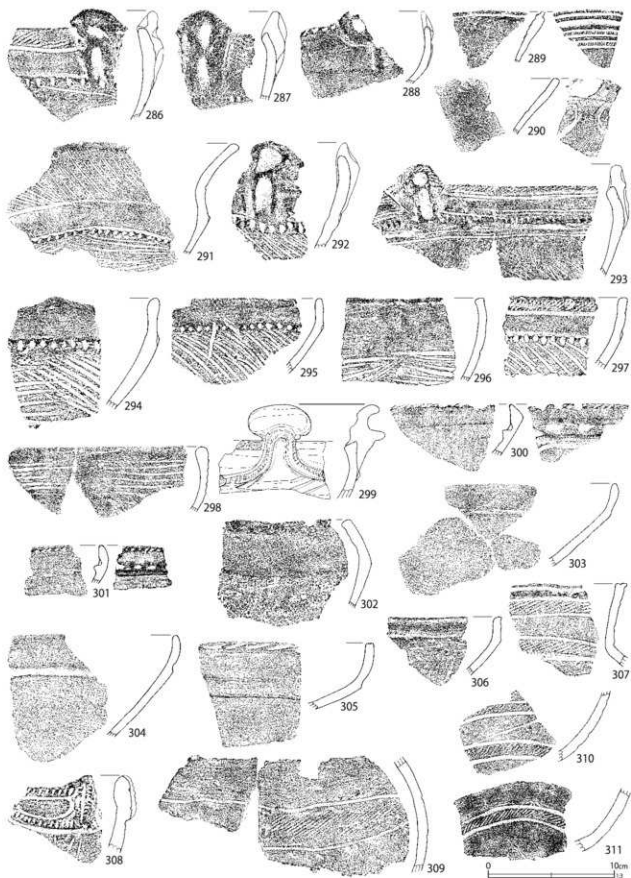
307は口縁部が外傾気味に立ち上がる壺であろう。口唇部に沈線が巡る。309も球胴形の壺の体部であろうか。縄文帯の描出が稚拙である。

308は口縁部外面が帯状に肥厚する波状口縁の鉢で、波頂部下に有刻隆帯を垂下し、肥厚帯は刻みで縁取り楕円形文を配す。曾谷式であろう。

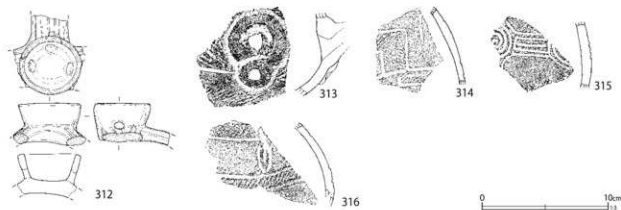
310・311は横位の磨消縄文帯を持つ浅鉢である。



第172图 西斜面出土遺物 (17)



第173图 西斜面出土遗物 (18)



第174図 西斜面出土遺物 (19)

312はT字状の三方向に橋上把手が延びる釣手土器である。

第174図313～315は後期中葉の注口土器である。313は注口部で、下位に良く磨いた、中央の窪む円文を配し、ここから胴部の横位沈線区画が延びる。区画の上下に縄文を施文する。314は鉤状の区画文を持つ。315は乾燥が進行した硬い器面に細沈線で渦巻状モチーフを連結する文様を描く。316は上下の縄文帯間に区切文から派生したS字状の縦連の綾線文を配す。

第175図317・318は無刻の貼瘤を持つ、後期後葉の安行1式の大波状口縁深鉢である。波頂部形状は317が三角、318は三角を基調に方形、319は頂部が二山の山形で下部に円窓が開く。

320・321は口縁部が肥厚し内湾する安行1式の平口縁深鉢である。323は波底部で、無刻の貼瘤を持つ。

322・324は帯縄文に代わり刺突や刻みを施す波状口縁深鉢で、322は二山の突起に対応して二列の瘤を持つ。刺突は竹管状工具を斜めに、半分刺突し馬蹄形となる。安行1式であろう。

325～329は横刻縦瘤や豚鼻状貼付文を持つ安行2式の波状口縁深鉢である。325・326・328は帯縄文の代わりに刻みを施す。326の刻列は同時期の条線土器の刻列にも似る。波頂部の突起は上端に窪みを持つ筒状で、窪み中央から放射状に刻みを施す。側面裏側には縦刻のある瘤を巻き付ける。なお327の波頂部側面にも同様の表現がある。

327の波頂部下には三角形の区画と中央に蛇行文を持つ菱形区画を施す。突起と瘤は剥落する。

330～332は縦刻横瘤を持つ安行3a～3b式にかけての深鉢である。杵状文が崩れ、332では楕円形区画となる。333～335舌状二段瘤を持つ安行3b式の大波状口縁深鉢である。334・335は縦刻のある鳍状突起を持つ。

336～第176図350は後期後葉～晩期前葉の平口縁深鉢である。336・337は無刻の貼瘤を持つ安行1式である。338の帯縄文の下端区画は結節沈線状の極細かい刻みである。

339・340も無刻の瘤を持ち、帯縄文に代わり刺突や刻列を持つ。341・342は口縁部に縦刻横瘤を持ち、342は横刻縦瘤を伴う。安行2式であろう。

344は二山の突起中央に横刻縦瘤を配置し、下端に刺突を施す。345・346は舌状二段瘤を持つ。口縁部に、345は縦刻横瘤、346は無刻の横瘤を伴う。347～350は口縁部に縦刻横瘤を持つ。347は直下に無刻の縦瘤を伴い、沈線は凹線上となり対向三叉文を施す。348は口縁部に蛇行する有刻の貼付文を施す。貼付文の終点始点の直下に、縦刻を持つ縦瘤を配す。砂粒を含む胎土や最終調整(ケズリ)の具合は晩期中葉の土器群と共通する。349は口端部の貼瘤末端が縦瘤と連結しコ字状の一体となる。帯縄文の盛り上がりはなく、楕円形区画文が配される。350は二連の横瘤で直下に横位の舌状瘤を配す。

351～353・355・356は口縁部が括れ、短く外反

する安行3a～3b式の平口縁深鉢で、口端部の肥厚は無く、頸部には沈線区画を持つ。353・356は器壁が薄く小型である。351・352は口縁部に山の突起を配し、陰刻の三叉文を持つ。352は頸部区画線に上接する弧線文を描出する。353は不明瞭だがやはり弧線文だろう。355はステッキ状モチーフを施文する。弧状部のみ二重の弧線となり、モチーフ内のみ縄文施文が無い。

354は口縁部が肥厚し、端部に沈線を施す「M」字状の蛇行貼付文を持つ。

357～364は肥厚する口縁部に縄文を施し、下端は沈線等で区画し有段とする、内湾器形の平口縁深鉢である。357・358・362は帯縄文下の区画に刻列を施す瓢形土器である。362では胴部にも、同様の刻列を施し有段となる。区画間は縦方向の条線を施す。359～361・363・364は紐線文系の半精製土器で、胴部に磨消弧線文を描出する。365は口縁部区画内に1段3条のLR縄文を施す。

第177図366・367は紐線文系土器で、肥厚する口縁に列点と沈線区画を持つ砲弾型の平口縁深鉢である。366は胴部最大径に口縁部と同様の区画を持ち、内部に磨消斜線文と磨消弧線文を描出する。安行3b式であろう。367は縄文を持たず、沈線区画内部は列点を施す。368は肥厚する口縁部を沈線のみで区画し、胴部には弧線文を描出する。安行3c式であろう。

369は全面に縄文を横位施文する土器で、口端部を平坦に作出する。S字状結節が見える。370は括れた頸部に押瓦隆帯を施す。体部には輪積痕が残り、全面に縄文を施す。晩期中葉であろうか。

371～373は後期安行式に伴う台付鉢の口縁部である。371は口端部に刻列を施す。372は中央の窪む円形貼付文と細密沈線を施す。安行1式である。373は豚鼻状貼付文を施し、方形区画内は条線を充填する。安行2式である。

374～379は晩期安行式に伴う台付鉢で、376は脚台部である。口縁部では379を除いて二山の突

起をもち、374・375では磨消弧線文や三叉文を持つ。無文部のミガキは丁寧で、黒色に仕上げるものが多い。第160図38も同類であろう。377～379は突起下に小さな円文を起点にする入組三叉文を持つ安行3a式であろう。

376・380～382・393は台付鉢の脚台部である。376は球胴状に内湾する器形で、後期安行式の可能性もある。肥厚する口縁部を沈線で区画し、縄文を施す弧線文を描出する。縄文は端部にも及ぶ。393は円窓の開く台付鉢の脚部であろう。端部は肥厚し、豚鼻状貼付文と楕円形区画文を描出する。

第178図383は縦刻横瘤を持つ鉢で、口縁部は短く外反する。384は器壁が薄く小型の平口縁の鉢である。文様は377～379と共通する玉抱三叉文である。385は口縁部に縦刻の小瘤を持つ安行3b式の平口縁の鉢である。文様は菱形文構成内に、入組文と対向三叉文を配するものと思われる。

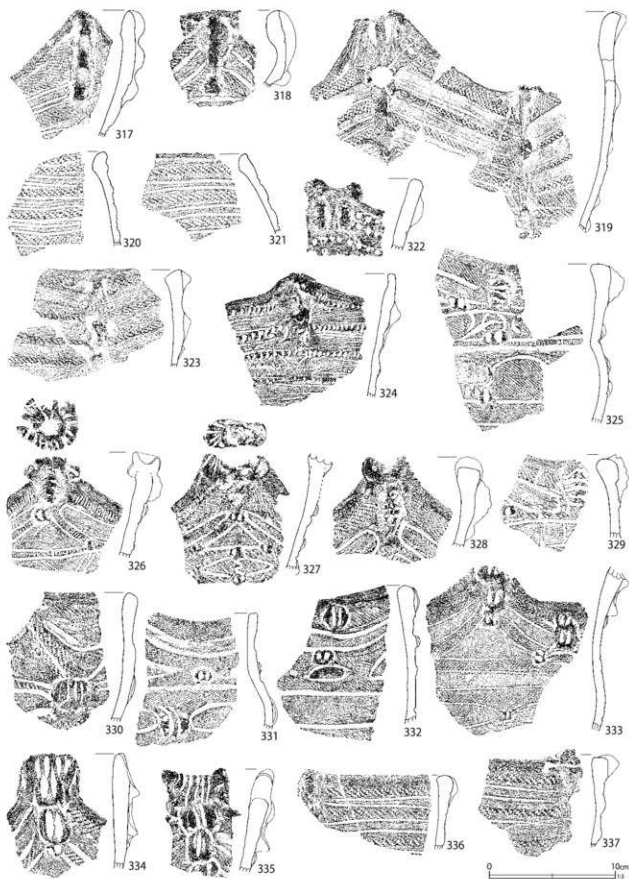
386・387・389は押瓦凸帯を持った平口縁の鉢である。文様は、386は玉抱三叉文、387・389は入組文が描出される。

388は縦刻横瘤を持つ平口縁の鉢で、瘤の直下に円形の窪みを持つ。390は、胴部が張り頸部が括れ、口縁部が短く外反する波状口縁の鉢で、沈線は太く、波頂部下に入組三叉文風のモチーフを持つ。入組部は貼付文を貼り付けている。最大径以下の内外面に炭化物が付着する。

391は胴部が張り、頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する、大洞式を起源とする器形で、大洞C1式に類するモチーフを持つ。器壁は薄く、磨消部は光沢を持ち、黒色仕上げで明らかに異質であるが、沈線の描出方法は在地的であろうか。突起はB突起状となる。

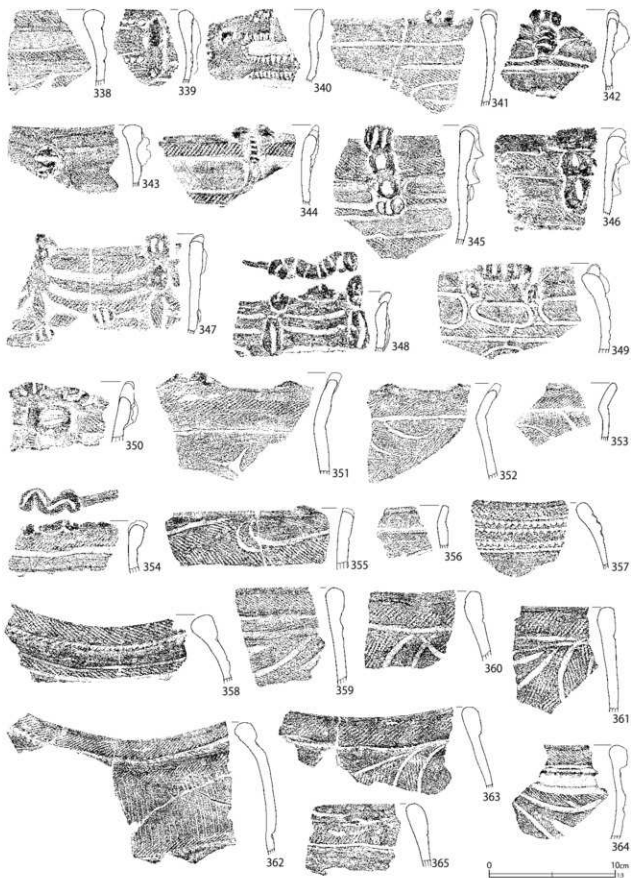
392は縦刻横瘤と横刻縦瘤、円形の窪みと豚鼻状貼付文を縦列に配置する。帯縄文に代わり刻列を施す。安行2式の注口土器である。

394～396は口縁部が強く内湾する注口もしくは壺型土器である。394は縦刻横瘤を持ちための沈

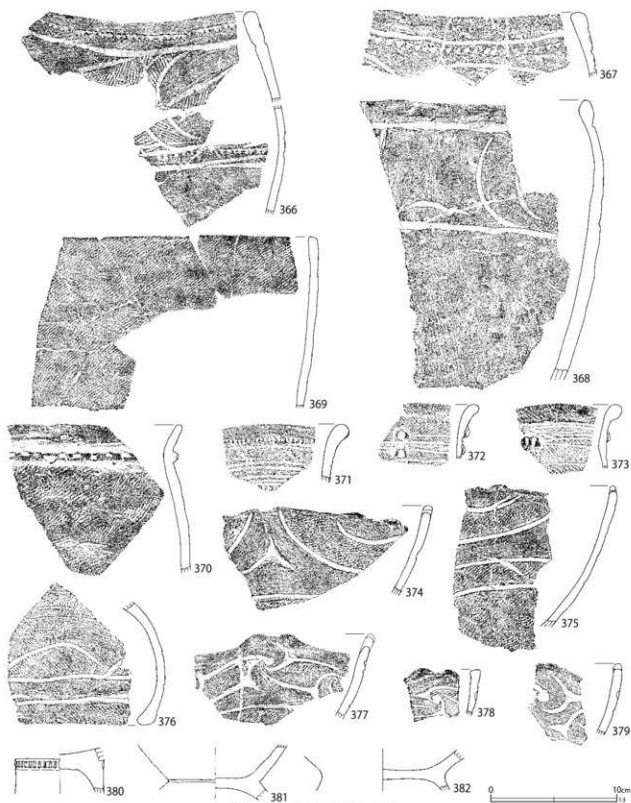


第175图 西斜面出土遺物 (20)





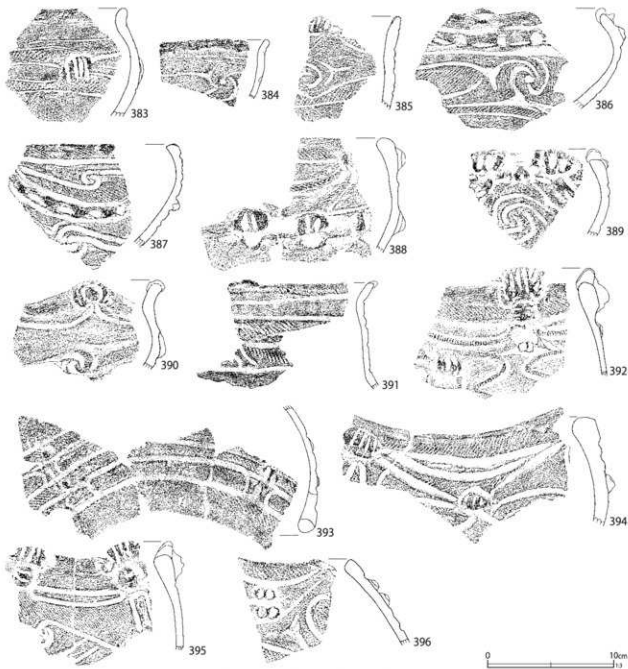
第176図 西斜面出土遺物 (21)



第177図 西斜面出土遺物 (22)

線で文様を描出する。395は縦刻横瘤と横刻縦縮を持ち、胴部には横位や縦位の杵状文と入組文を描出する。396は二段の豚鼻状貼付文と、陰刻の三叉文を描出する。晩期前葉であろう。

第179図397~401は晩期の姥山Ⅲ式系統の波状口縁深鉢である。397・398は波頂部下に上下の入組文を持つ。胴部最大径に刺突列を施す沈線区画を持つ。397の波頂部には粘土紐をハチマキ状に



第178図 西斜面出土遺物 (23)

貼り付ける。ともに砂粒を極めて多く含み、口縁部はミガキ、胴部及び内面は砂粒の動くケズリ調整である。色調は異なるが同一個体だろう。

399~401は胴部が張り、括れの強い波状口縁深鉢で、同一個体である。口端部に沿った沈線区画内に刻列を施す。399は波頂部から刻列を伴う沈線区画を中心に菱形構成を取る。400の波底部では円文を配し、隣り合う菱形文を連結する。胴部はかなり張り、括れの屈曲が強い。胴部最大径に

は列点を施す沈線区画を持つ。胎土は砂粒多いが焼成は堅緻。内面は横位に丁寧に磨く。

402は胴部から口縁部が直立ないしはわずかに内傾して立ち上がる平口縁深鉢で、口端部に連続的な押圧を加え、部分的に漣状に仕立てている。口縁部直下と胴部に刻列のある横位の沈線区画で文様帯を作る。文様帯内部は、内部を列点で充填する、三叉文風の三角形文を対向させ、接点に円文を配す構成は姥山形的である。

403・404は安行3 c～3 d式の波状口縁深鉢で同一個体である。波頂部には、三叉状入組文を描出し、胴部区画の列点は複列化する。器面調整は、外面はケズリ、内面はミガキである。

405・406は括れのない安行3 c式の平口縁深鉢で、同一個体である。405の口縁部は、低い二山の突起状だが、突起か、全周して漣状の口縁部となるかは不明である。口縁部下には二本の沈線で無文帯を作り、口縁部は角頭状工具の刺突、胴部は同一施文具による単沈線を3～4列に充填する。砂粒が多く内外面ともにケズリである。

407～409は細沈線区画内に、先尖状工具で刺突を充填する安行3 c式の波状口縁深鉢で、天神原式の影響を受けている。同一個体である。407は波状口縁、409は胴部の文様帯区画であろう、波頂部から刺突を充填する縦位区画が垂下し、口縁部や胴部区画に沿って弧線文を配す構成だろう。

410は口縁部が肥厚し、下部は沈線段が付く。ここから派生するように弧線を配し、生じた区画内に先尖状工具で刺突文を充填する。

411～421は安行3 d式である。411は三叉状入組文を持つ平口縁深鉢で、やや内傾気味に立ち上がる。412～414は同一個体で、頸部が括れ、口縁部が外傾しながらわずかに内湾する。

415～417は同一個体の平口縁深鉢である。胴部は張り、頸部はきつく括れ、口縁部が外傾する。胴部最大径付近に七本一単位の櫛状工具で横方向に短沈線を巡らせた結果、複列化した列点と同様の効果を得る。東斜面出土資料同様、口縁端部は面取りしている。418は波状口縁である。

419はわずかに肥厚する口縁部が外傾して立ち上がる。三叉状入組文を描出する。420は三叉状入組文を二段に配する安行3 d式である。421は時期不明だが、晩期中葉頃のものであろうか。

第180図422～424は晩期の鉢類である。422はやや肥厚する口縁部がわずかに外反し、色調は黒色で、器面は丁寧なミガキで光沢を放つ。口端部と

頸部に沈線区画を持ち、区画線状に小粒の瘤を配す。口縁部の瘤を起点とした三角形文内に三叉文を配し、弧線文等を描出する。

423・424は平口縁の鉢だろうか、径も器高も大型にはならない。423は曲線基調の菱形文を描出する土器で、区画内には「」( ) 状のモチーフを配する。上段は重弧線となる。最終調整はケズリで砂粒の動きが明瞭である。424は口縁部が内湾する鉢で、縄文は持たず、文様帯内に楕円文と分銅形の区画文を交互に配す。

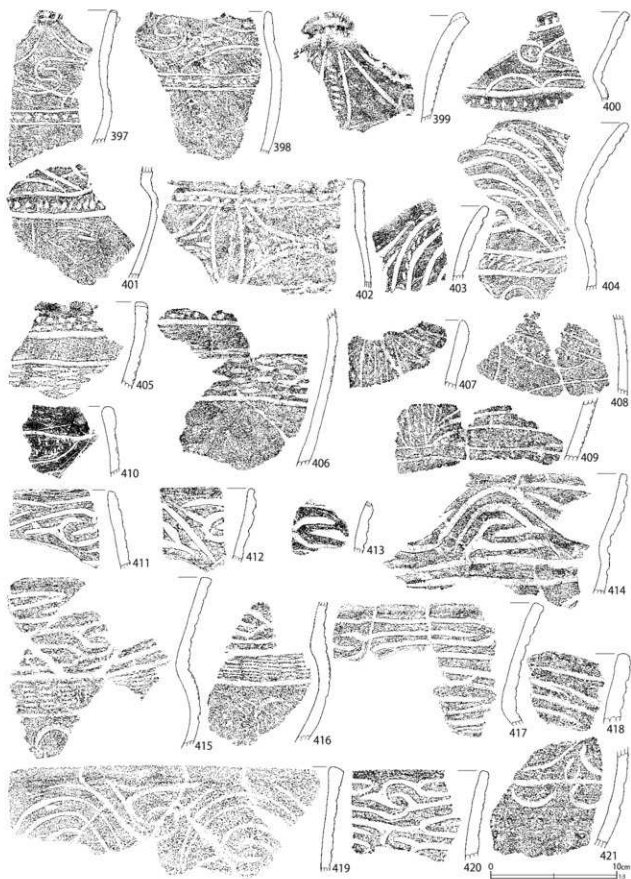
425・426は同一個体で壺のような器形であろうか。入組文風のモチーフに列点を充填する。

427～431は東北系の土器群である。427は口縁が内湾する小型の鉢で、色調は黒色、器面は丁寧に磨き光沢を放つ。文様は乾燥の進行した硬質な段階で施文する。口縁部の二本沈線間に三叉文風に彫去する。大洞 BC 式平行であろうか。

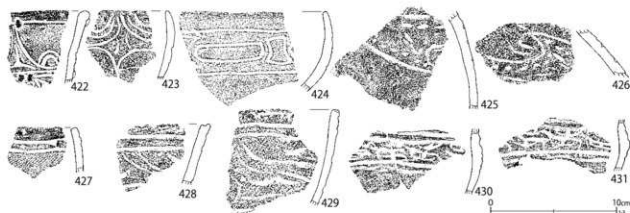
428・429は口唇部に凹線を持つ。428は口唇部外面側にスリットを入れ、429は刻みを入れる。428は地文を持たず沈線のみで文様を描出する。色調は黒色だが、器面のミガキは無く、最終調整はケズリである。429はやや内湾気味に立ち上がる鉢ないしは深鉢だろうか。黒色化は無く、器面も荒れ、一部を磨くのみである。地文に縄文を持ち、太めの沈線で文様を描出する。大洞 C 1 式で行であろう。

430・431は同一個体の鉢である。器壁はやや薄く、他の土器に較べて丁寧に磨かれるが、砂粒が多く、放つ光沢も弱く、文様も稚拙で、在地模倣のものである。頸部と胴部最大径を二本の横位沈線で区画し、幅の狭い文様帯とする。大洞 BC 式の羊歯状文の崩れたモチーフを持つ。

第181図432～440は粗製土器の条線文土器である。432～436は口縁部に沿って刻列が巡り、条線が縦～斜位のものである。432～435は口端部がわずかに肥厚し、口縁部は外傾気味に立ち上がる。安行1式である。435の刻列は二段で、一定間



第179图 西斜面出土遗物 (24)



第180図 西斜面出土遺物 (25)

隔(約10mm)で同一のパターンを繰り返すことから、施文具幅を示しているかもしれない。436は口縁部に沈線区画を持ち、刻列は結節沈線風である。胴部にも同様の区画を反復する。

437・438は胴部に横位区画を持ち、条線は区画上位では弧線を繋げるような横方向、下位では斜位になる。安行2式である。刻列の下位の平行する位置に、刻列施文に伴う工具痕が残る。類推される施文具は幅20mm程度の半裁竹管状で、刃先は内湾する。437・438は同一個体である。

439・440は口縁部に列点や紐線といった装飾の無い、条線のみを深鉢で、東関東に特有の条線文土器である。439は口端部が内側に肥厚し、440は肥厚しない。安行3a式であろうか。

441・443・444は肥厚し有段化した口縁部に、沈線区画と列点を施す紐線文土器で、条線は横方向である。443・444は同一個体と見られ、区画内に二本一単位の沈線で斜線文を描出する。刻列は結節沈線風で、441はほとんど沈線と化し、刻列下部に工具痕が残る。施文具幅は20mmである。

442の口縁部は肥厚、有段化し、列点も沈線区画も無い。条線は横方向である。安行2式～3a式であろう。

445～第182図461は安行2式～3a式の紐線文土器で、452・453は条線が縦～斜位で、その他は横である。452は口縁部が比較的直立し、条線以外の文様は無い。445・448・450は肥厚する

口縁部に沿って沈線区画をする。文様は、縦線(447・448)、斜線(447)、対向弧線(446は単沈線、445・450は重弧線)、451はそれ以外である。

第182図453～460は口縁部の紐線が胴部にも及ぶものである。454では紐線が垂下し、453・455では二条の紐線が垂下する。453では紐線間は磨いている。455は太沈線による弧線も伴う。

456～460は口縁部の紐線から別の紐線が派生するその他の土器である。459は斜位の短い紐線が派生し、口縁部から紐線まで太沈線で縁取りする。蛇行文と弧線も伴う。460と同一個体であろう。457は弧状の紐線が垂れ下がる。胴部に縄文を充填し、豚鼻状貼付文を配する弧線文を描出する。458も弧状の紐線文が派生する。沈線による対向弧線も見える。条線が消失している。459の口縁部は板状工具による刻みで、肥厚する口縁部から紐線が蛇行する。461は胴部破片である。胴部の紐線下の条線は乱雑に引かれている。

462～473は晩期前葉から中葉の紐線文土器である。462は胴部上半の条線が消えつつある。

463～466は縄文を施文する紐線文土器で、安行3b式であろう。463は縄文を充填する対向弧線文間に列点を縦位に配す。464・466は豚鼻状貼付文を起点に、上下は帯状の縄文帯を、また左右には縄文を施文する三角形区画文を描出する。三角形文は対向した場合、姥山系の菱形文構成となり、豚鼻状貼付文で円文を置換したのかもしれない

い。465は三叉文や入組文風のモチーフを描く。

467~473は口縁部に紐線ないしは刻列を持ち、条線の消失したものである。安行3b式~3c式である。467は口縁部と胴部最大径に紐線を持ち、区画内を太沈線で弧線を描く。468は口縁部と胴部に刻列を施す沈線区画を持つ。区画内は蛇行文を伴う斜線文を描出する。469は沈線区画内にキャタピラ文風の刻列を配し、文様は、刻列を伴う弧線文を描出する。470は二本の並行沈線で入組弧線文を描出する。471も口縁部と胴部区画内を、おそらくは対向弧線とさらに縦位に区画し、稲妻文を描出する。対向弧線間には縦位の列点を配す。472は焼成堅緻で硬質な土器である。胴部区画内に、二本の太沈線による弧線文と、内部に列点を施す斜線文を交互配置する。473は肥厚する口縁部に列点を複列に充填する。また胴部には同種の列点を充填する斜線文と縦位区画文を持つ。

第183図474~第185図522は晩期の無文の土器で、474~481は素口縁のもの、482~492は口縁部が肥厚するもの、493~499は粘土紐輪積痕と指頭押圧が明瞭に残る素口縁の土器、500~513はいわゆる有段口縁の粗製深鉢、514~522はその他の無文土器を一括した。

474~478は口縁部付近に最大径のある器形である。最終調整はケズリで器面の凹凸は少ない。479の口縁部下では器面調整時のノッキングの痕跡が残り、おおよその工具を当てた幅(約15mm)がわかる。口端部には、478では比較的太めの、479では極く細かい刻目を入れる。

480・481は頭部がやや括れ、口縁部がわずかに外反する。481の端部には押圧を加えている。

482~492は口端部が肥厚する紐線文系の土器群で、483や486は有文土器にも確認される安行式特有の口縁部形態である。484は後述の有段口縁の粗製深鉢の類であろうが、一部で有段が解消され素口縁となっている。口端部は、外側が肥厚するもの(487~489)、内側が肥厚するもの(482・

490~492)、両側のもの(485)がある。器面調整はケズリで全体的に凹凸が少ない。487では前述の調整時のノッキングが観察され、おおよその工具幅(約15mm)がわかる。491や492では一部輪積痕が残る。

493~498は粘土紐輪積痕と指頭押圧が明瞭に残る素口縁の土器を一括した。多段に輪積痕が残り、器面の凹凸(指頭圧痕)も著しく、意図した整形であろう。494・496は輪積痕が波打ち、493では輪積痕と口端部が波打つ。指頭押圧に伴うものであろうか。口縁部付近に最大径を持つ砲弾形が多いが、499では頭部が括れ、口縁部が直立気味になる。497は最大径の張りが著しい。

500~513はいわゆる有段口縁の粗製深鉢で、おおむね晩期前葉から中葉頃である。口縁部外面に粘土帯を被せて有段部を作出する。506が二段となるほかは、本書の対象範囲では一段のみで占められる。507~510は口縁部に細かい刺突を伴うもので、508・510では二段の刺突列、507は列構成がなく不規則に充填する。511~513は有段部から派生するようにC字状ないしは弧状の粘土帯を貼付するもので、前二者は扁平幅広の粘土帯、513は幅狭で高さがある。

いわゆる有段口縁粗製深鉢ではないが、515も肥厚する口縁部から弧状の粘土紐が派生する。514は肥厚する口縁部とは接続せずに、粘土紐による下向きの弧文を貼付する。後述の面付土器(第187図564)と胎土や焼成等に共通性があり、同一個体の可能性もある。

516~519は肥厚する口縁部に、指頭押圧以上の強い押圧を加えた土器である。517は短く外傾する口端部外面に規則的な押圧を加え、装飾的な効果をもたらしている。

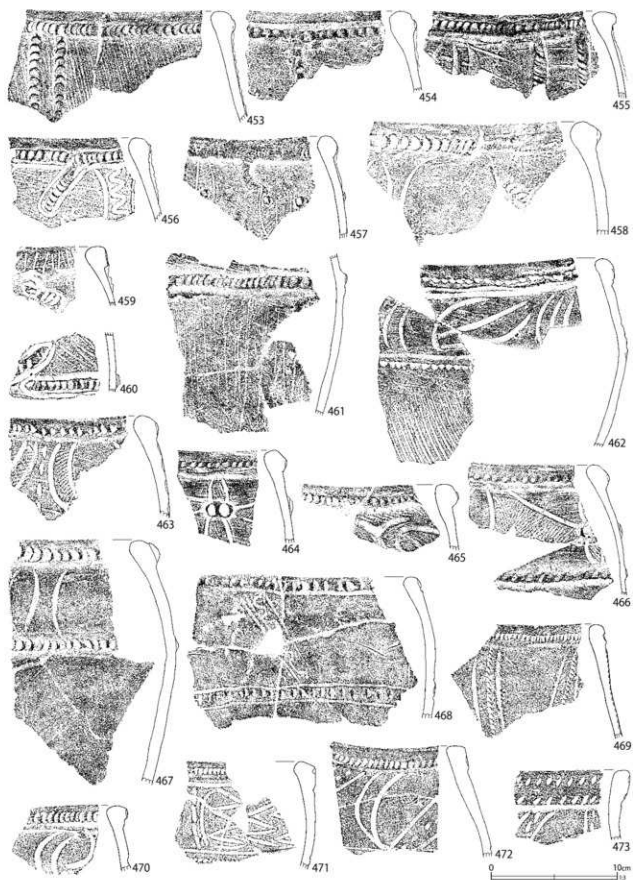
521は折り返された口端部が短く外反する。器壁は薄い。522は無茎壺のような器形だろうか。

第186図523~547は底部を一括した。底面の痕跡について、全体的な数量では時期を通じて、ミ

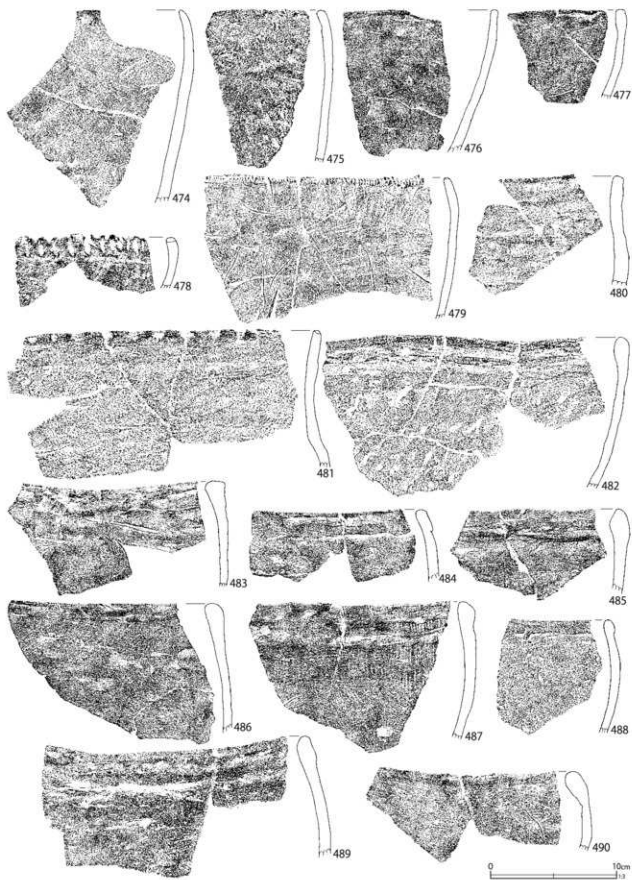


第181图 西斜面出土遺物 (26)

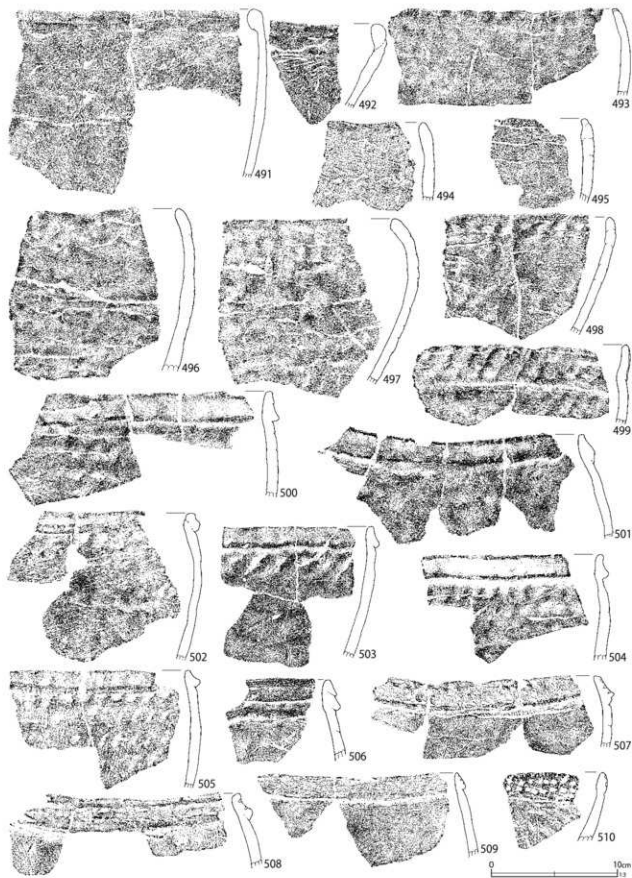




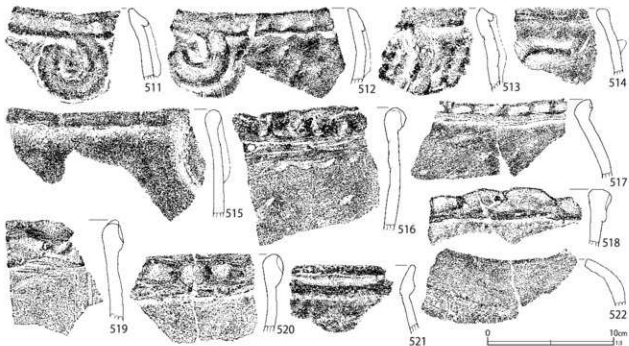
第182图 西斜面出土遺物 (27)



第183图 西斜面出土遺物 (28)



第184図 西斜面出土遺物 (29)



第185図 西斜面出土遺物 (30)

ガキやケズリ等の調整をし、圧痕の残らないものが多い。無調整ないしは部分的な調整により、大きく編組痕と木葉痕の二者を確認した。木葉痕(527)は編組痕に対して微量である。編組痕の種類は、大きくござ目編み(523・526・531・534・536・537・546等)と網代編み(525・540・543等)とがある。

転写の範囲は、底部全面以外では、中央のみで外周を調整するもの(524・534・537・542・544・546)、外周のみなもの(523)がある。538や544ではケズリ調整が明瞭である。

523～527は、底部から比較的直立気味に立ち上がる後期前葉～中葉頃までの深鉢、532～544までは底径が小さく外側に開いて立ち上がる後期後葉以降の深鉢である。

528～530は本書対象資料中最も底径の小さな一群である。535は底面付近まで縄文を施文する。539の文様は懸垂文風なのだろうが、不規則で軌道が読めない。546・546は鉢だろうか。547は体部が算盤玉状に屈曲する小型壺である。

第187図548～557は接合帯上面に刻目を持つ土器である。548～551は堀之内1式で、552は同2式である。553は横位沈線のみで判然としないが、

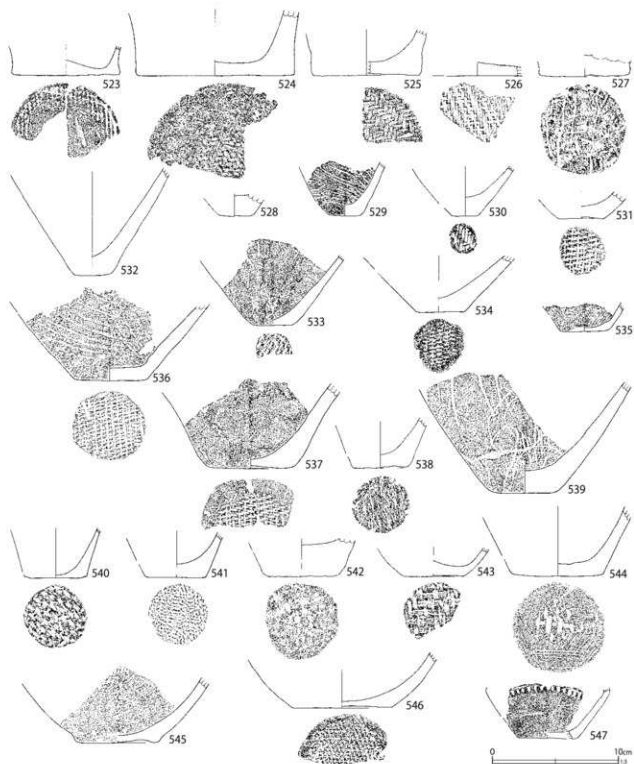
後期前葉の中で捉えられる。554は縄文のみ、555～557は器面調整のみの土器片である。

刻目は、器壁に対して直角のもの(548・549・551・553・554・556)と斜位のもの(左傾557、右傾550・552・555)がある。またその間隔は、比較的密なもの(548～551・556・557)と疎なもの(554・555)のほか、一部のみなもの(552・553)がある。遺跡全体で80点前後しか確認できず、傾向性を掴むほどの母数ではないが、時期的には後期前葉期の資料で占められる。

558～561は赤彩のある土器片で、558～559は後期後葉～晩期前葉頃の口縁部、560・561は後～晩期の胴部破片であろう。

562・563は圧痕のある土器で、562は後期前葉の深鉢外面に胎土中の有機物の圧痕が残る。563は内面に捻れた有機物圧痕が転写される。

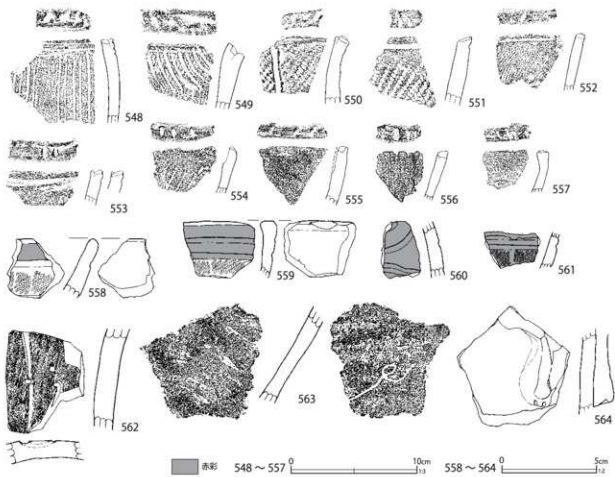
564は人面付土器とした土器片で、無文地に眉・鼻を思わせる隆起帯を貼付する。両者は眉間で接続しT字となり、鼻部の下端は面取りされ、角頭状工具を刺突して鼻孔を表現する。第185図514とは胎土・焼成が類似し、同一個体の可能性もある。



第186図 西斜面出土遺物 (31)

**土器片加工品** 第188図565～第192図686は土器片加工品である。565～606は円形基調の、狭義の土製円板(盤)とみなせるものである。このうち565～602はⅡ類(胴部)で、603～606はⅢ類(底部)である。Ⅲ類は二次加工が明瞭なもののみを

認定した。565～569が後期、570は晩期前葉の注口土器、571～576は後期後葉～晩期前葉頃の胴部を素材とする。577～585は縄文のみの土器片である。585は胴部下端から底部にかけての破片で珍しい。外面側に剥離は無く、内面は全周する典型



第187図 西斜面出土遺物 (32)

的な片面加工である。586～602は無文の土器片で、586～588は粘土帯と指頭押圧が明瞭に残る。晩期前～中葉頃の粗製土器であろう。590～602は器面調整のみの破片で時期判定は困難だが、後期前葉から晩期に収まるものであろう。

第189図607～631は特定形状のものを一括した。607～620は半円形状のB類、621～625は三角形のC類、626～627は方形のD類で、628～631はその他の形状（E類）とした。

626は縁辺がきれいに整えられ、627は粗い剥離の結果として方形になっている。628は方形の土器片の二側縁を加工し、挿入部のみは両面加工である。629・630は外周が直線と曲線からなるもので、ともに側縁の一部に摩擦痕や磨痕が観察される。631はハート形に整えられ、一部に弱い磨りが見られる。

632～第191図677は口縁部を素材とするI類

で、素材とする土器片は632～635が後期前葉、636～639は同中葉、640～657は後期後葉から晩期前葉の有文土器、658～672は後期後葉～晩期前葉の条線文ないしは組線文系の土器、673～677は無文の粗製土器である。

635は大きな剥離は無いが、口縁の突起部を利用し、全体を円形に整えている。637は加曾利Bの突起部で、内外両面からの剥離に意図的な加工を読み取った。638は内面の外周全体に帯状の剥落部をもつもので、後述の677や第38図90との関係性が想起される。640や650では瘤が、また648では口端部の突起が意図的に剥がされている。このほか肥厚した口縁部を素材としながら、その端部を左右両側から打ち欠く資料が多数あり、意図的な剥離を読み取れる。観察表には「口端打欠」と記した。

第192図678～683は、土器片の表裏面や破断面に二次的な磨面や研磨痕をもつものを一括した。